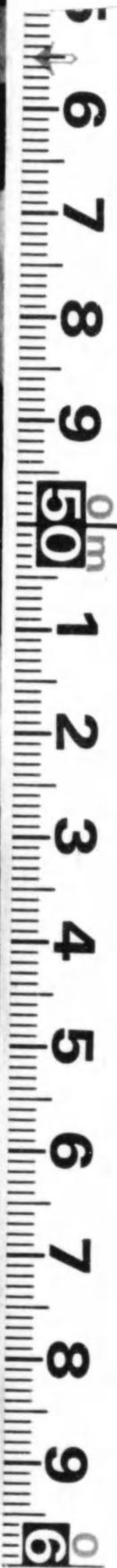


横濱柳土小史

特232

124



始



特 232
124



横濱
紳士小史



横濱市観光係

序

横濱は開港以後、あまりに華々しい發展だつたので開港以前の横濱の姿が、稍もすると、影のうすい感がある。しかし郷土史をひもとくと、今日の發展は既にむかしに、その素地をなしてゐたもので決して偶然の發展ではない。

有史以前から人の住みよい所であつたし、一千數百年のまへから朝廷の厚き恩寵に浴してゐたし奈良、平安、鎌倉、江戸時代の變遷にも随絆して來た。江戸末期、開港さるゝや明治維新の光りを強くうけて、明治、大正、昭和の今日へと長足な躍進を示した。

昭和の大維新に臨み、肇國精神の昂揚が強調されてゐるが、その精神は既に全國、津々浦々に漲りわたつてゐて横濱郷土史のなかに、ふくいくたる香をはなつてゐる。

國民として又市民としての心の糧は横濱のどこからでも求めることができるのである。本書は極めて雑駁なもので少しもまとまりがない。時代的にか、類別的にか、整理すべきであつたと思ふのであるが時日の關係で、それができなかつた。しかし一つ／＼が郷土色を持つてゐて味もあれば香も高い。軽い意味で散策のときの伴侶にでもなつて頂ければ幸ひである。

資料は『横濱市史稿』、『各町村史』栗原清一氏著『横濱の史蹟と名勝』石野瑛氏著『武相史蹟名勝要覽(横濱市)』等によつた。又栗原、石野兩氏に貴重な資料寫眞及び編纂上の御指導を仰いだ。末筆ながら厚く感謝する。しかし興味的のものを中心としたよめ史實に離れたものもあり、重要なもので落ちたものも數々あることゝ思ふ。それ等は全く編者の責任であつて叱正にまち、完璧を期したいと思ふ。それ／＼御教示を願へれば幸甚である。

横濱郷土小史

目次

序

第一編 郷土史概観

一 上古の地形と住民	二
二 古代文化の恵み	三
三 奈良時代と平安時代	四
四 鎌倉時代と室町時代	五
五 江戸時代と幕末	六
六 明治大正の時代	七
七 昭和時代の光輝	八

第二編 神社の巻

一 伊勢山皇太神宮	一〇
二 州于辨天の古事	一一
三 駒形明神と迷兒の碑	一二

第三編 寺院の巻

四 洲崎神社と憶	一三
五 浅間神社と袖磨山	一四
六 偉業の礎石おさんの宮	一五
七 笠簀稻荷と板碑	一六
八 護良親王と王子社	一七
九 永谷の天満宮	一八
一〇 瀬戸神社の由来	一九
一一 大石神社と石争ひ	二〇
一 弘明寺の観音	二二
二 野毛の不動	二三
三 鶴見の總持寺	二四
四 浦島寺の傳説	二五
五 豊顯寺と鬼元内	二六

第四編 史蹟の巻

六 願成寺の墓	二七
七 幽魂吊ふ合祀靈場	二八
八 官修墓地の幽魂	二九
九 根岸の白瀧不動	三〇
一〇 太田古墳の碑	三〇
一一 異國の土と化した人々	三一
一二 寶林寺の釣鐘	三二
一三 大寧寺のヘソ薬師	三三
一四 金澤の稱名寺	三四
一五 龍華寺と家康	三五
一六 金龍院と九覽亭	三六
一七 玉泉寺餘話	三七
一八 親鸞逗留の永勝寺	三八
一九 天宗寺の身替観音	三九
二〇 舊城寺の無限の薬師	三九
二一 眞福寺の國寶	四〇
二二 本興寺の由来	四〇

一 伊勢山の離宮址	四七
二 東海鎮守府址	四七
三 外務省出張所址	四四
四 開港談判の舊地	四五
五 粹な櫻木町驛	四六
六 最初の瓦斯會社址	四七
七 洋風の學校藍謝堂	四八
八 野毛山の鐘	四九
九 世界最初の金星觀測	五〇
一〇 太田の陣屋址	五一
一一 落漠たる蒔田城址	五二
一二 神奈川の臺場址	五二
一三 神奈川の聖蹟	五三
一四 石井本陣の御膳水	五四
一五 御殿町の由縁	五五
一六 幕政の慈悲上無川	五六
一七 生麥事件の遺蹟	五七
一八 開港直後の領事館	五八
一九 ヘボン博士の偉業	六〇

二〇	古戰場權現山	六一
二一	市場の一里塚	六二
二二	重忠奮戦の地	六三
二三	憲法起草の地	六四
二四	金澤文庫の由来	六五
二五	保土ヶ谷の古事	六六
二六	戸塚の聖蹟	六七
二七	『驛』戸塚	六八
二八	見付と本陣	六九
二九	小机城跡	七〇
三〇	飯田義家の館跡	七一
三一	舊中川の塚	七一
三二	市ヶ尾の横穴	七二

第五編 名所の巻

一	黒船と八王子の鼻	七四
二	砲壘だつた本牧海岸	七五
三	數寄を凝らした三溪園	七五
四	八聖殿と開港史蹟	七六

五	盛場『ザキ』の昔	七七
六	横濱の三大公園	七八
七	開港記念會館	八〇
八	震災記念會館	八一
九	掃部山と水溜	八二
一〇	情緒漂ふ南京街	八三
一一	臺町と袖ヶ浦	八四
一二	梅の名所杉田	八五
一三	川和の菊	八六
一四	桃の名所綱島	八七
一五	難所權太坂	八八
一六	田谷の洞穴	八九
一七	金澤八景	九〇
一八	兼好法師の哀愁	九二
一九	戸塚の松並木	九三
二〇	柏尾川の櫻堤	九四

第六編 傳説の巻

一	古事記に残る神松	九六
---	----------	----

二	弘明寺の七ツ石	九七
三	本牧神社の御馬流し	九八
四	根岸八幡の神祭	九九
五	神奈川のお天氣井戸	一〇〇
六	尼將軍化粧の井戸	一〇一
七	御所五郎丸の墓	一〇二
八	上無川と御召縮緬	一〇三
九	『鶴見』の名の起り	一〇三
一〇	境木の地藏	一〇四
一一	血櫻の由来	一〇五
一二	照天姫の傳説	一〇六
一三	入定塚の口碑	一〇七
一四	義公と板地藏	一〇八
一五	和泉の酒池	一〇九
一六	名馬鬼鹿毛の逸事	一〇九
一七	影取町の由来	一一〇
一八	松下公の名裁き	一一一
一九	渡邊峯山と荏田町	一一二

第七編 起源の巻

一	國歌『君ヶ代』	一二四
二	天皇陛下に言上	一二五
三	一般市民に拜謁を賜ふ	一二五
四	國旗の掲揚	一二六
五	近代陸軍の訓練	一二六
六	軍隊のラツパ	一二七
七	我國に於ける禮砲	一二七
八	鐵道開通の頃	一二八
九	光榮に輝く燈臺	一二九
一〇	かねの橋由来記	一三〇
一一	從軍看護婦	一三一
一二	外國人との結婚	一三一
一三	野球の國際試合	一三三
一四	潜水作業の始	一三三
一五	テレグラフの話	一三三
一六	邦字新聞の發行	一三四
一七	天沼のピアザケ	一三五

一八	牛鍋の流行	二五
一九	種痘と證明書	二六
二〇	洋瓦焼と水道	二七
二一	乗合馬車と人力車	二八

第八編 歌謡の巻

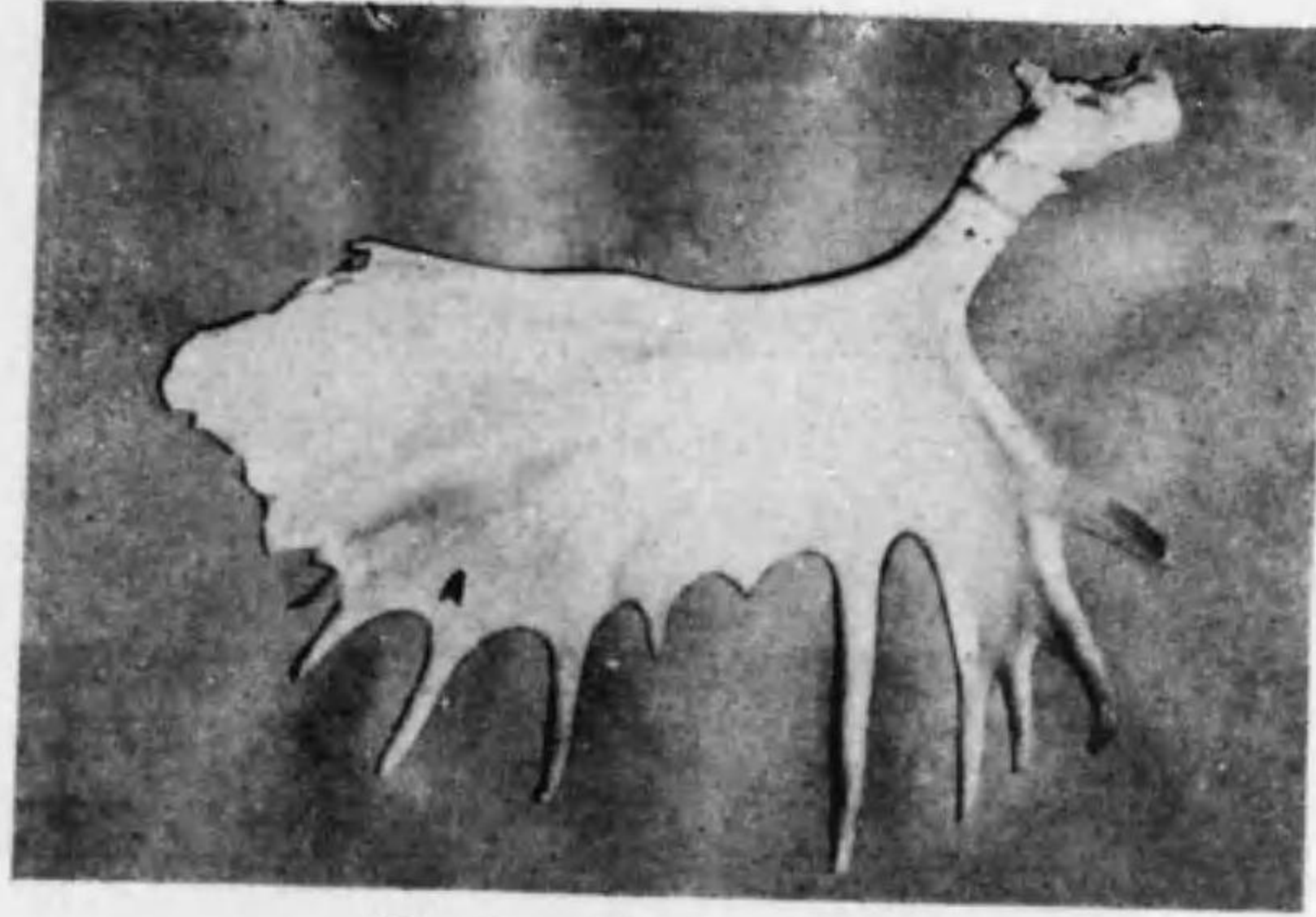
一	大津繪節「雨の夜」	一〇〇
二	流行歌「野毛の山からノイエ」	一〇三
三	横濱市歌	一〇三
四	新曲「濱の手振り」	一〇三
五	歌謡曲「港むすめ」	一〇四

寫眞挿入百十一葉

(註書以外の寫眞ハ全部昭和十五年十二月二十四日横鎮許可濟)

第一編 郷土史概観

一、上古の地形と住民



角のカシラへ
(二下地地耕見士富田太南)
(堀發りよることの米十)



圖像想のカシラへ
藏氏郎一順形尾

太古の横濱は鋸齒のやうな地形であつたと考へられてゐる。大岡川、惟子川、瀧の川、入江川、鶴見川筋が海として深く入込み、之れを挟んだ臺地が海岸線であつたとされる。南太田富士見耕地の臺地の地下二十餘米の凝灰砂岩中から巨大なヘラシカの角が出てゐることや鶴見川口からマンモスの齒、中村町の臺地の裾から鯨の齒が発見されてゐることや、次いで石器時代の遺物が臺地に點在してゐる分布状態から斯く考察されてゐる。そして上代から人間が生活してゐたことが、それ等の遺物の発見によつて瞭かだ、舊アイヌ族の使用したものと思はれ繩紋式土器、固有日本人が製作したと思はれる彌生式土器其他古代の遺物が多數發掘されてゐる。

二



器土式生彌
(堀發らか山島浦)
(藏校學小町本)



器土式紋繩
(堀發らか塚貝澤ッ三)
(藏所氏瑛野石)

二、古代文化の恵み

二千數百年乃至三千年まへに既に人間が生活してゐたが、それから下つて一千數百年まへの金石併用の所謂原史時代から文献に見ゆる初期にあつては燦たる古代文化が開けてゐることが臺地の諸所に點在する墳丘や横穴、その出土物によつて窺はれる。磯子區室ノ木の古墳から鐵地金銅張の馬具が出で、永田には製陶甍があり、生麥には鍛冶甍がある。又日本書紀には安閑天皇元年の條に、武藏國造笠原直使が他の地と共に倉庫を屯倉の地として朝廷に上つてゐることが書かれてゐる、倉庫は今の久良岐で御料地であつた。屯倉に屯田司が遣はされた、次いで大化の改新となり國司、郡司を置かれた。皇室の御威光に早くから浴してゐたことがわかる。



甍冶鍛
(勝社神山杉麥生)

三

三、奈良時代と平安時代

持統天皇の六年に相模の國司が管内御浦郡（三浦郡）で赤烏の雉を獲たので、これを献上したこ



國寶弘明寺觀音

とがあつたが、稱徳天皇の御代に武藏國橋樹郡の人が久良郡（久良岐郡）で白い雉を獲たので朝廷に献じたところ、天皇は吉祥とせられ、敬感なまめならず、武藏の國司と久良郡司に各々位を昇叙せられた。聖武天皇の天平十三年詔勅に

四、鎌倉時代と室町時代

横濱は鎌倉の鬼門に當るといふので鎮護のため求明寺（弘明寺）を源家累代の祈願所とし又杉山



古文書（寶生寺藏）

辨天（洲于辨天）を初め頼朝が報賽又は創建したといふ社寺が數ヶ所ある。又方位に對する迷信が強く、鎌倉で下知することが悪いときは横濱に来て下知したこともあつた。北條時宗の下知狀に神奈川の文字が止められてゐる。神奈川の地名が記された最古の文書で、鶴見の名は仁治元年のものに残されてゐる。

横濱の地名は今の元町から山下町の方へかけて象の鼻のやうな寄洲があつたので、それから起つたものと推察されてゐる。地名が文書に止められてゐるのは、寶生寺に藏する嘉吉二年の横濱村薬師堂寄進書である。

五、江戸時代と幕末

江戸時代の横濱は、徳川氏の代官が支配してゐた。文祿四年の繩張水帳によると増徳院他十二戸であつた。萬治、寛文にかけて攝津能勢の人吉田勘兵衛が今の伊勢佐木町を中心とする百十六町歩の内海埋立を行つて開墾した。勘兵衛は江戸で木材を業としてゐたが、石高千石以上收獲の地を開墾すれば士分に取立てられるといふので此大事業を敢行したものだといはれる。この新田に小作百姓が次第に集まり耕耘に餘念がなかつたが、安政元年黒船渡來、同六年通商條約の締結となり開港場横濱の幕が切つておとされた。

約條
約條
亞墨利加合衆國と帝國日本兩國
人民誠實不朽の親睦を以て
兩國人民の交親を肯と一向後守
守と條相まひる合衆國より全權
マテユカレトヘリ人々を日本不差越一
日本君とまう、全權林 大守頭
井戸對馬守伊澤美作守鶴殿
民部少輔を差を一教諭と信
て雙方左と通極い
第一條
日本と合衆國と其人民永世不



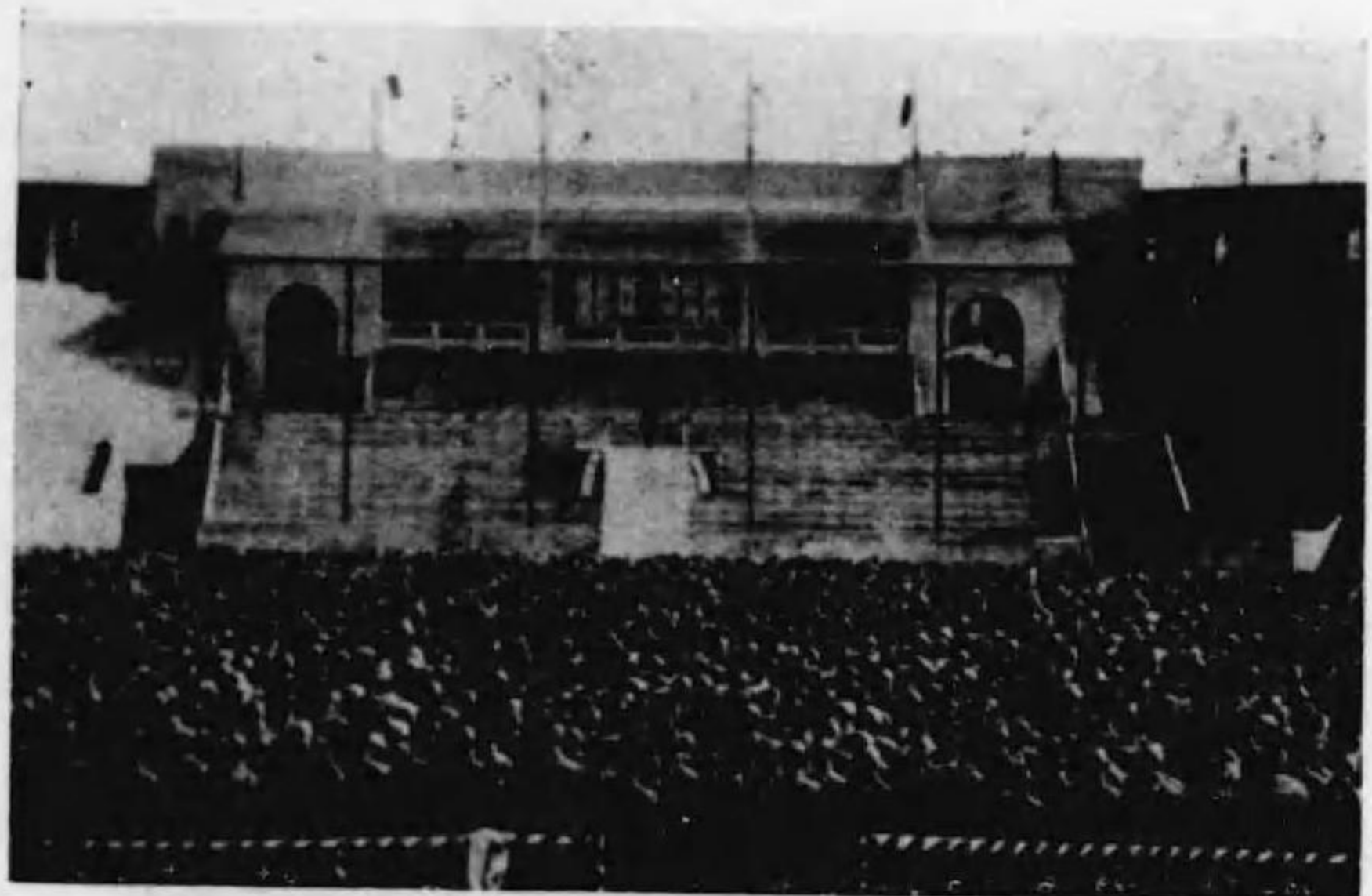
町木佐勢伊の日當祭年十五港開

六、明治、大正の時代

明治元年三月横濱と戸部の役所が裁判所と改められたが、同六年合併して神奈川裁判所となり行政形態が革められたのを初めとして幾多の變遷を経て明治二十二年四月一日市制が施行された、當時は面積〇、三五方里、人口十二萬一千餘であつた。二十五年築港に着手、日清戦争を経て、三十二年に條約改正、三十四年第一回の市域擴張が行はれ、日露戦争後諸般の施設整備され、四十二年盛大な開港五十年祭を舉行、四十四年第二回の市域擴張が行はれた。

第一次歐洲戦争によつて市勢の躍進著しきものがあつたが、大正十二年震災で焦土と化し復興事業の大計畫を樹立工事に着手した。

第二編 神社の巻



式興復ぐ仰を幸臨御の下陸皇天

七、昭和時代の光輝

昭和四年四月二十三日、畏くも 天皇陛下には行幸仰せ出され、親しく復興状況を覽はせられるの光榮に市民は感激した。翌二十四日盛大なる復興完成式を挙げ、昭和時代の巨歩をふみはぢめた。十一年第四回目、十四年第五回の市域擴張が行はれ、總面積四〇一方軒、人口八十六萬六千餘に上つたが、昭和十二年日支事變の勃發、さらに十四年歐洲に第二次戰亂が起り、十五年九月日獨伊軍事同盟成立して世界新秩序の推進と大東亞經濟圈確立とに邁進することにきまり、内は新體制を具現するに至つた。

一、伊勢山皇太神宮

横濱の總鎮守として市民敬神の的になつてゐる伊勢山皇太神宮は元、花咲橋際邊の宇、平臺にあつた。明治三年四月十五日時の權令井關盛良が官に奏して現地に奉遷し横濱の總鎮守にし、同八年縣社に列せられた。

開港以來潮のやうに押しよせて來た西洋文化に魅せられて稍もすると人心が輕佻浮薄に流れる傾きがあつたので敬神愛郷の純情に引戻そうとしたもので、遷宮のとき權令は町々の總代に大々的の祭禮をするやう命じた、め恐らく空前絶後とも思はれる大祭が十五、六兩日行はれた。參列の官員烏帽子下垂、町役人は麻上下を着用し縣廳の東に棧敷を設けて各國公使領事を招待した盛況を極めたものだつたといふ。震災後再建された白木造りの神殿神々しく眺望のよい景勝の地である。



伊勢山皇太神宮

二、州于辨天の古事

州于辨天は羽衣町の嚴島神社の本尊で古いことを、たづねると治承四年源頼朝が義兵をあげ四海を統一してから伊豆土肥の杉山に鎮座しました辨財天を茗荷島（州于島ともいふ）に移したもので、それで杉山辨天、州于



州于辨天

辨天、横濱辨天ともいはれてゐる。

當時社の敷地は辨天通六丁目から本町北仲通太田町に跨がつて老松に圍まれた一萬二千餘坪の壯大なものであつた。

徳川三代將軍家光から社領六石一斗五合の御朱印を賜はつた。

舊横濱村の鎮守で明治二年現在の羽衣町に移された。



嚴島神社

三、駒形明神と迷兒の碑

一二

羽衣町の辨天社境内の一隅箱庭のやうな小池の丘の上にある小さい祠が駒形明神で、もとは今の

縣廳前にあつたものだが州干辨
天が羽衣町に移るとき一緒に移
し祀られたものである。

その小池の片隅に横濱にタツ
タ一つの珍らしい『迷兒のしる
べ』といふ石標がたつてゐる。

昔警察署などのなかつた頃、



迷 兒 の 碑

人通りの繁しい四辻などによくあつたもので迷子と見れば連れてゆき親達もこゝで待合はしたものだ。別段お上で設けたものでもなく奇特の人が建てたものであつた。

四、洲崎神社と憶

青木町の總鎮守洲崎神社は郷社である。建久二年源頼朝が官幣大社安房神社の祭神を分靈して奉祀された古い宮で頼朝が奉獻した神鏡は神寶として今も保存されてゐる。

境内に憶おぼえの神木がある。青木町の地名は憶から起つたといはれてゐる。或時神木を汚したものがあつたのでその枝を伐り去つたため遂に立枯して幾年か過ぎたが神主は神木の失はれることを嘆じて幾日か祈願を籠めると枯木から新芽が出たと言ひ傳へられる。此時水戸の歌人眞楯が『今もなほもゆる憶は里の名と共に榮えん萬代までも』と詠じた此若芽が關東大震災までに三度焼かれたが其都度新芽をふいて神木の名を輝かしてゐる。



震 災 の 前 の 洲 崎 神 社

一三

五、浅間神社と袖磨山

浅間神社の鎮座まします山は昔袖磨山といつて東海道の一名所であつた。



袖磨山の浅間社

その名の起りは此山ぎはまで磯で山岸に
大浪小浪が打ちよせてゐたため、旅人が通
行するときは此山の麓にそひあるき袖をす
り合ふばかりであつたといふところから言
ひなされたものだといふ。

社の入口左方、山の半腹に富士の人穴が
あつた。

袖磨山に安置し奉る浅間大菩薩は富士から飛來したものだといふ傳へられてゐる。



おさんの宮

六、偉業の礎石おさんの宮

伊勢佐木町をはじめとして關外三十六ヶ町（町名
改正前）は今から二百八十年ほどまへまで渺々たる
入江であつた。萬治二年吉田勘兵衛翁が埋立て今日
の基礎をつくり總稱して吉田新田といふ。翁は事業
の人ばかりでなく又信仰の人でもあつて長者町の常
清寺、南吉田の日枝神社など翁の建立したものであ
る。

大震災のとき周圍一面猛火に包まれたが唯一つ此
お宮だけが不思議にも無事であつた。その日枝神社
をおさんの宮ともいふ。おさんの宮については迷信
的の傳説もあるがおさん王さまの訛傳といはれる。

七、笠程稻荷と板碑

一六

神奈川新町の笠程^{もり}稻荷社は元祿二年の建立で『むかし土人笠を戴いて社前を過ぐるときはおのず

と脱げて地に落つ』といふ傳説から笠脱^{もり}稻荷と稱したが後に稗^{もり}と改められた。

此社に現在横濱にあるものうち最も古いものと思はれる板碑が、年代は不明だが、彫刻の梵字など頗る妙味がある。



板 碑

史學者で此板碑を知らぬ者がないほど有名である。

八、護良親王と王子社

舊鎌倉郡川上村は合併されて上柏尾、柏尾、前田川上、品濃、舞岡、平戸の各町に分かれたが白旗、日枝、熊野、八幡、王子等の村社がある。その王子社は口碑によると、

大塔宮護良親王が建武二年伊賀守義博に弑されたとき、親王の遺臣某が御首を潜かに奉じて川上村の南四ツ杭に來て井水で御首を洗ひ側の山中に葬り奉り王子神社と稱したといふ。その井戸を首洗井戸と稱され今も尙殘されて居り、該地の宇を御墓山といはれてゐる。



王 子 社

一七

九、永谷の天満社

永谷町上永谷の天神社は日本三體天満宮と稱される。延喜二年菅原道真公が筑紫太宰府で寶鏡に向ひ、自ら姿を彫刻せられた御像三體の一つを祀つてゐる。御像の丈は一丈八分、他の二體は筑紫太宰府の安樂寺と河内國土師村の道明寺にある。

永谷と菅公の關係——それは道真公の末子敦茂卿が關東に下向し永谷に居を構へたが御像は敦茂卿が賜はつたものだといふことである。星霜こゝに九百年、文筆に志すもの、信仰厚く、杜頭の老杉は黙々として昔を物語つてゐる。社殿の後方に菅秀塚がある。菅秀才敦茂卿の筆を埋めたところと傳へ筆塚ともいはれる。



天 満 社

一〇、瀬戸神社の由來

磯子區六ツ浦町の郷社瀬戸神社の御神體は大山祇尊、尙、菅公の座像を配祀してある。何れも奈良朝時代の名作といはれる。傳へ

られるところによると文治元年、頼朝が鎌倉の近所に豆州三島明神を勸請しやうとして三枚の札を海に流した。その一の札が當所についたので此地に建立されたのだといふ。或は此神むかし金龍院の飛石の上に降り止まつた爲この地に建立となつたものだとも言つてゐる。ともあれ頼朝



瀬 戸 神 社

を始め代々の將軍執權又は管領足利氏の尊崇篤き御社であつた。

一一、大石神社と石争ひ

港北區長津田町の大石神社の御神體は石である。

傳へるところによると、今の戸塚區瀬谷町に昔三つの大石があつた。

それは瀬谷と長津田の境にあつたのだが、兩村のものが互に我村のものだと争ひ、遂に神意にきくことになり三つの石を積重ね、倒れた方向によつて定めることになつた。

三つの石のうち最大の石が長津田の方に倒れたので持去りそれが大石神社に祀られたものだといふ。残りの一つは瀬谷の妙光寺の開基妙光尼の墓となり、村人は之をゲーキバーサンと呼んでゐる。

一つは舊中和田の火石寺にあつたが廢絶して今は神明社にある。

第三編 寺院の卷

一、弘明寺の観音

山門には名工運慶の作と稱される仁王様が頑張つてゐる。瑞應山弘明寺は眞言の古刹で千有餘年のむかし、印度の善無畏三藏法師が眞言弘通のため此地にきたとき山の中腹に七ツ石を加持して埋め祈誓してさつたといふことである。後天平九年天下に疫病流行、聖武天皇は深く御軫念あらせられ、行基菩薩をして海内を巡錫せしめ民の苦を救はせ給ふた、菩薩はこの地に來つて精舎に籠り七日七夜一刀三禮の至誠をこめて十一面観世音を彫んだ。この尊像こそ國寶弘明寺観音である。これから七十二年の後弘法大師が手づから閼伽の井戸を掘り千座の護摩を修せられたといふ。



弘明寺の山門

應永年間建立の横濱最古の建築楓關門もあつたが、おしくも震災で倒潰して了まつた。

二、野毛の不動



野毛の不動

野毛山の突端、成田山延命院といふのであるが、野毛の不動様といつた方がわかりやすい。本堂前には急な二段の石段が築かれ其直下には水行場があり、寒中でも水垢離をとる信者がたえない。石段の中腹には三十六童子があり種々の碑石があるが、中に山岡鐵舟の碑もある。元、水行場の邊まで漣が寄せてゐた野毛浦の名所である。

千州が埋立てられ各國の兵隊さんが訓練してゐたが「野毛の山からノエ」といふ歌は此邊から見おろした時のものである。

三、鶴見の總持寺

曹洞宗の本山總持寺は省線鶴見驛上の高臺、明治三十一年石川縣下にあつた本山が炎上したので此地に移ることになり、同四十四年工を竣へ遷祖の大典を行つたのである。境内實に十萬餘坪主なる建物としては唐宗時代の建築に則つた三松關、大鐘樓、勅使門、常照殿、佛殿、紫雲臺、待風館、放光堂、大庫裡、大祖堂等がある。之等の堂塔、伽藍を點綴して渴鼓林、白字溪、雙眸丘、望獄臺、龍王池、古砧壇、攝月坡、千光城、吹上塀等十指を屈する勝景がある。

その傍の花月園は七萬餘坪、兒童本位の遊園地で名高い。



總持寺

四、浦島寺の傳説

浦島太郎の傳説は各所にあるが横濱にもある。太郎は相州三崎の者で雄略天皇の御宇、靈龜に乗



昔の浦島寺

つて龍宮に渡り三百餘年を経て以前の姿で歸り初めて父、太夫の計を知り悲しみの餘り墓のある白幡の峰（神奈川區浦島山）に堂を建て乙姫から貰つて來た觀世音の像を祀つて懇に吊つたといふのである、此觀世音は靈驗あらたかなところから信仰するものが多く、淳和天皇の御耳に入り後に淨土宗の第四祖寂惠上人が寺にして和恩院の末寺にした。これが歸國山浦島觀福寺で俗稱浦島寺といふ。例の桑名屋の大火で類焼し廢寺になつたが當時の遺物は飯田町の慶運寺に保有され浦島觀音も秘藏されてゐる。

五、豊顯寺と鬼元内

櫻の名所で廣い境内に幾千本かの櫻花が満開のときは花見がてらの參詣者で賑ふ。

本堂の高野槇は横濱十名木の一つで市の保護木である。

戰國時代の永祿十年武田信玄は威勢さかな小田原攻めの道すがら北條の女婿吉良左兵衛左の居城蒔田を陥れんとした。時に青木城主多米周防守元内は主家の大事と一族郎黨を引具して蒔田に馳せさんじ、流石の信玄をして旗を卷かしめ鬼元内の異名をとつたほどの豪の者、その元内が同寺に苦むしたのが、何れにせよ多米氏傳來の什寶が



寺題豊

五輪塔に名残りを止めてゐる。元祖權兵衛の墓だともいはれるが、何れにせよ多米氏傳來の什寶が同寺に保存されてゐる。因に青木城は本覺寺附近だつたらしい。

六、願成寺の墓

劍光一閃異人を斬つて斬罪に處せられる日、紋服姿で目隠しもせず従容死について立會つた異人の膽を抜いた清水清治や幾度か生れ變つて夷を打たんと辭世を残して斷頭臺の露と消えた間宮一、港崎遊廓で荒れくるふマドロスの頭に商賣用の鳶口を

打込んで人々の難を救つたが罪にとはれ横濱中の鳶の者から木遣音頭で送られ『オイ骨を頼むぞ』と小氣味よくも死を急いだ好漢小龜の墓などが願成寺



石碑の一宮間と治清水清

の境内にある。



合祀靈場

七、幽魂を弔ふ合祀靈場

關東大震災は千古未曾有の天變であつた。横濱で歿死したものの三萬餘その中名もわからない者三千三百餘人の菩提を弔ふため市で合祀靈場を建設した。毎年九月一日の年忌には参詣者で身動きもならぬ有様である。碑文は大正十二年九月一日關東ノ地大ニ震フ蓋前古未曾有也横濱市ニ於テ歿死ヲ遂ゲタル者無慮三萬人此ノ中姓氏不詳ニシテ假葬ニ附シタル者實ニ三千三百有餘ヲ算ス今茲ニ一周忌ニ値フ地ヲ相シテ合葬ヲ行ヒ墓碑ヲ建て以テ永ヘニ幽魂ヲ弔フ

大正十三年九月一日

横濱市長 從三位勳二等 渡邊勝三郎



官修墓地

八、官修墓地の幽魂

戊辰の役は血戦であつた。幾百幾千手負ひの戦士がそこ此處に呻いてゐた。横濱には開港しかてら西洋醫學があり大病院もあつたので官軍の傷者が續々横濱に送られて來た。全癒して歸隊したものもあるが、不幸不歸の客となつたものもある。その遺靈が久保山の官修墓地に葬られてゐる。

墓碑を見れば長州藩土州藩が主であるが、奥州白河棚倉、若松、あるひは京都、鳥羽のものもある。今は訪ふものも少く縣廳で弔ふてゐる。

九、根岸の白瀧不動

根岸海岸の真中邊、鬱蒼たる森の中に急な石段がありそれを登りつめると不動堂がある。昔、山崩れから発見された洞穴から金佛が現はれたのを元祿三年鎌倉の佛師に像を彫ませ、此金佛を腹籠りとしたのがこの不動であるといはれてゐる。

本堂から見渡した景色は筆紙に盡し難い。脚下には十數丈の瀑布が落下して涼音を不斷に傳へてゐる。

一〇、太田古墳の碑

太田の陣屋の背後日の出町三ノ八三番地崖の中腹に太田道灌鎧掛の松といふ老松があつた。明治三十年伐り倒したところ其丘から千年を経たと思はれる古墳が発見された。中から古刀や鏡玉や二三の人骨が現はれたが如何なる由緒のものか歴史にもとめることができないので後の考察に便利にと久保山光明寺境内に葬り且つ其顛末を記した碑を本堂の右手に建てゝある。

一一、異國の土と化した人

山手の中腹に北面して磨きたつた大理石の墓標が市街の中央からもよく見える、所謂山手の外人墓地で不幸にも異境の土となつた人々が永遠に眠つてゐるところである。

最初この墓に葬られたものはペルリ渡來のとき檣から墜死した水兵で、生麥事變のリチャードソンを始め浪人のため鎌倉で斬られた英人、井土ヶ谷で難にあつた佛人、本町で殺された露人、ボンチ畫家として名高いワクモン、連理の梅の主人公モーレル夫妻、英佛戰爭、第一次世界戰爭の在留外人戦歿者の忠魂碑などがある。モーレル氏は京濱間の鐵道敷設の功勞者であるが中途病で墮れ夫人も同日夫の跡を追ひ共葬した。モーレル氏が生前愛玩してゐた連理の梅を移植して手厚く弔ふた。

毎年盆の十三日、横濱市史料調査會で墓守のない之等外人の慰靈祭を行つてゐる。

一一、寶林寺の釣鐘



寶林寺

宮元町三丁目の停留場から約十五丁永田町右手、山の中腹にある禪宗の古刹寶林寺は昔七堂伽藍の調つた崇敬なものであつたが、戰國時代に荒れくちたのを名僧月船和尚が此地に移して再興したものである。

本堂前の梵鐘は今も昔にかはらず時を報じてゐるが、黒船さはぎの時、幕府は寺院の梵鐘を大砲に鑄換へる案をたて、徴發金を出した。

寶林寺の梵鐘も徴發命令をうけたが歎

願書を出して漸く助命の恩澤に浴した生きのこりの鐘である。

一二、大寧寺のヘソ薬師



範頼の墓

磯子區六浦町の大寧寺は元は薬師寺といひ、眞言宗だつたが後、源範頼公の法號をとつて禪宗に改め、大寧寺とした。範頼公の墓といはれる五輪塔そのそばに數個の五輪と石碑がある。

本尊は薬師十二神これをヘソ薬師といふ。

勸進帳によると、昔、伏見帝永仁二年この村に貧しい少女がゐた。父母の忌日に當つても貧しいために供養ができなかつたそこで絲を繰り、ヘソとして之れを賣り父母の佛餉に供しやうとしたが買ふ人がなかつた。或る時童子が一人來て之を買つたその金で供養をしたが不思議に思つてゐたところ薬師佛の前にそのヘソがあつたので薬師が少女の純孝に感じてやつたことゝ初めて知つた、以來ヘソ薬師といふのだとある。

一四、金澤の稱名寺

磯子區金澤町の稱名寺は維新前境内の面積二十三町歩あつた。眞言律宗南都、西大寺末別格本山

である。本尊彌勒菩薩は五尺五寸の木佛、文永六年唐から渡來したものだといふ。

佛前すべての佛具は鎌倉初期の名工の手になつたもの、又龜山天皇の勅願所でもあつた。北條實時が金澤に別荘を建て稱名寺を建立した。七堂大伽藍の壯觀を呈したものだ



稱名寺の山門
(昭和五十年十一月十五日横領許可濟)

つたが今は本堂と寶藏ばかりで他は忘失してしまつた。



龍華寺
(昭和五十年十一月十五日横領許可濟)

一五、龍華寺と家康

磯子區洲崎町松林中にある古刹、眞言宗の檀林で本尊は大日如來、明應八年、後土御門院の勅を奉じて龍華寺と號した。

太田道灌は不動尊を寄附して武運長久を祈つた。「七重八重花は咲けども」といふ有名な歌が出たのは、その頃だといふことだ。徳川家康は當寺に入御して御朱印を下したといふ。

岩たゞく波のよるゝ来て見れば

月さへ渡る瀬戸の角橋

遊覽に來た家康が詠んだ歌だといふ。

一六、金龍院と九覽亭

金澤の金龍院は上杉憲方の建立で、本尊は正観音二尺餘の坐像で、僧行基の作といはれる。金澤札

所十一番、境内には九尺餘の飛石があり、金澤四石の一つである。

金龍院の境内を抜けて、數十段の石段を上ると八景展望の勝地九覽亭に達する。藤原道長も此上に遊覧したといはれる。又宮様方が數回御成りになつてゐる。

九覽亭と名づけたのは八景以上



金龍院の飛石
(昭和十五年十一月十五日
横鎮許可濟日)

に景色を眺望できるといふ意味をとつたといふことだ。

一七、玉泉寺餘話

戸塚區金井町の玉泉寺は後村上天皇正平二十三年の創立だといはれるが、文政の頃中興の祖誠拙和尚が再興された。その誠拙和尚について種々の逸話が傳へられてゐる。

和尚は小僧の頃、伊縁宇和島十三萬石伊達公の菩提寺佛海寺にゐた。伊達公は住持靈印和尚を訪ふて四方山の話をしたものだが、或時小僧(誠拙)に肩を叩かせ、江戸から歸りに法衣を買つて来てやると言はれた。出府、歸國しての或一日又小僧に肩を叩かせたが法衣を買つて来て呉れなかつた。催促すると『忘れた』と言つたので小僧は矢庭に公の頭を拳固でなぐつた。公は咎めず私が悪かつたと謝した。

誠拙和尚が鎌倉圓覺寺の住職だつたとき、樓門修繕のため勸進した。江戸深川の商人で白木屋某が百兩を寄進わざ／＼草鞋掛で圓覺寺まで持つて來たが茶一杯も出さず禮一言もいはなかつたといふので愚痴をこぼすと、誠拙和尚はいきなり鍋蓋を取つて白木屋をなぐり、そして『自身の功德をつむのに禮を言はれる道理があるか』と怒鳴りつけたものだ。

一八、親鸞逗留の永勝寺

戸塚區下倉田町の永勝寺は初め天臺宗に屬し長延寺と號したが、嘉祿年間親鸞上人が當寺に逗留



聖徳太子の像

した際、時の住僧が親鸞に歸依し眞宗に改め、下つて徳川時代に永勝寺と改めたのである。面掛阿彌陀如來は親鸞上人逗留中の自作であるといはれ、又聖徳太子像も親鸞の作だと傳へられる。昔、別堂に安置してあつたが戰國の頃堂宇が頽廢し雨露に浸されるやうになつた。或る雨の夜に「笠を着せよ」と呼ぶ聲がするので村民が怪しんでたづねると、御像の聲だつたといふので本堂に移した。笠乞太子の別名は之に由來する。尙、腹籠の小像は太子御自らの作であると云はれる。

一九、天宗寺の身替觀世音

川和町向臺の天宗寺に祀つてある觀世音像は、元備後國御調郡瓦道村法輪山淨土寺の本尊で上宮太子の作である。昔、安丸と言ふ信者が勸請の途中賊に遇ひ、刀で切りつけられた處、菩薩の背が切られ、安丸は無事であつたので、身替觀世音と稱せられて人々の信仰を集めたとの言ひ傳えがある。

二〇、舊城寺の無眼藥師

港北區三保町の舊城寺は、古義眞言宗に屬し開山は圓海僧都である。舊記に依ると、當處は昔、山田右京之進なる者の居城であつたと云はれ境内に二重の空堀があり本丸跡と云はれる處もある。尙本寺境内の藥師堂には行基菩薩の作と云はれる無眼の藥師如來像がある。昔、當地に眼病が流行した折、村民の難を救ふ爲、菩薩自ら造つたものと云はれる。

二一、眞福寺の國寶

港北區荏田町眞福寺の釋迦如來は昭和八年國寶に指定された。如來は立像五尺三寸四分、清涼式釋迦像で造像の由來は詳かでないが建治三年在銘の金澤稱名寺の像に前後して製作されたものと見られてゐる。衣紋に見る特殊の彫法等は清涼寺の原像に近いものである。

第四編 史蹟の卷



本興寺の山門

二二一、本興寺の由來

四〇

戸塚區上飯田町の本興寺は由來によると、永徳二年日
什上人が鎌倉の埋橋に本興寺なる寺を創設した。後二百
二十六年を経て第二十四世日經上人が浄土宗の僧廓山と
江戸城で宗論し幕府の怒に觸れて劊刑に處せられた。本
興寺の本立坊と云ふ者寺への厄を懼れて本尊及寶物を携
へ上飯田に逃れ一字を建てた。之が本寺である。日蓮眞
筆蔓陀羅一幅其他の寶物が今も残されてゐる。

境内は廣く樹木に富み、明治初年造營の本堂彫刻物な
ど田舎には稀れな見事なもの、山門は餘程年數を経た
ものである。



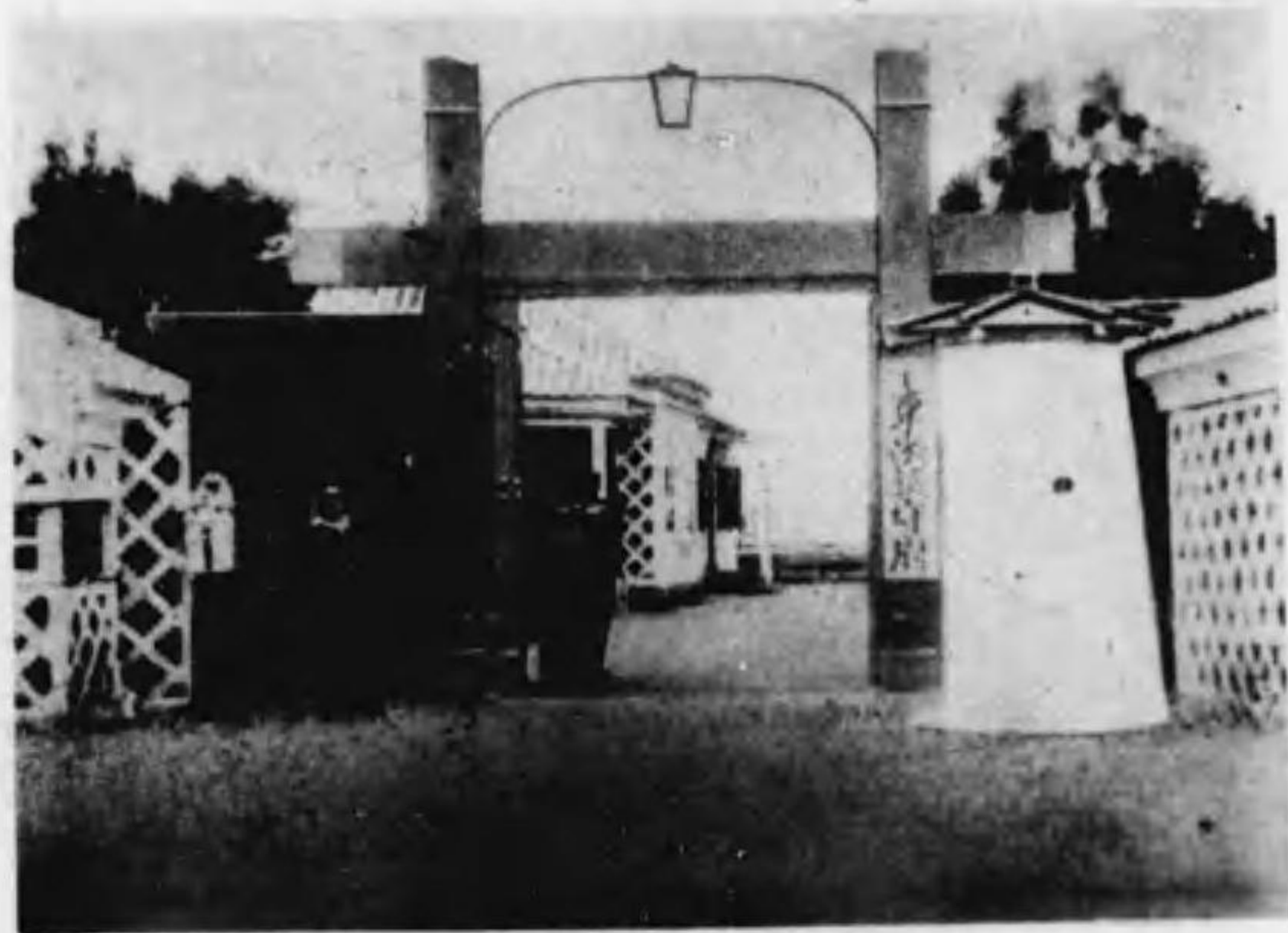
離宮址

一、伊勢山の離宮址

明治初年に横濱にも離宮があつた。

明治天皇も幾度か茲に御休息あそばされた由緒あるこの舊地は中區宮崎町五八番地、現在の伊勢山正金俱樂部の建物がある地である。

願くば後代の市民のために何等かの方法で永久に記念したものである。



當時の東海鎮守府

二、東海鎮守府址

『日本橋下の水、遠くロンドンに通ず』と警告した林子平を獄に投じて安んじてゐた幕府も數年ならずして如實に黒船がやつて來たので驚いた。そして刀も槍も國を護るに役立たないことに氣がついて海軍を急造貧弱ながらも日本に黒船ができた。

御維新後明治九年東西鎮守府を建てることになり、東海鎮守府は横濱に決して現在の生絲検査所倉庫のところへ設置されたが、明治十七年横須賀に移された、明治大帝、昭憲皇太后行幸啓には、いつも御休憩所にあてられた。當時御座所の庭に椎の大木が三本あつて殊のほか大帝の御感に入つたので之を保存すべく櫻木驛前に移植したが大震災のため枯れて了まつた。



外務省出張所

三、外務省の出張所

横濱に、もと外務省の出張所があつたものだ、場所は櫻木驛前大江橋際、今ガソリン、スタンドのあるところである。

日米初め諸國との條約ができ領事館も設けられ、外交關係が忙しくなつたが、一々江戸まで出かけるのは不便だといふので出張所ができて、明治十五六年頃まで種々の外交事務がこゝで處理された。

其すぐ附近に有名な旗亭富貴樓があつた。明治政府の大官が出入し、女將おくらは男まさりの女傑として明治政治史の裏に働いてゐる。



最初の英國領事館

四、開港談判の舊地

横濱の開港と通商條約締結の日米會談が横濱で行はれた當時の横濱は全く一の漁村だつたので場所は畑中、建物はバラツク、床几はお寺から借用したといふ時代もの、之の舊地は今の縣廳から道路にかけた邊である。當時附近の百姓嘉平治の庭にあつた玉楠が目印になつたが、現在英國領事館の前庭にある。震災のとき焼かれたが根



現在の玉楠

元から新芽が出て今は枝をなしてゐる。



開通當時の横濱櫻木町驛

五、粹な櫻木町驛

四六

日本最初の鐵道は横濱驛(今の櫻木町驛)——新橋驛(今の汐留)間であつた。

畏くも 明治大帝の臨幸を仰いで嚴かに汽車開通式(當時は開業式と云つた)が兩驛で擧げられた。大正十二年の震災まで寫真にあるやうな當時の古典的の建物が櫻木町驛として使用されてゐたものだつた。開通當時の線路は現在市電が通つてゐる櫻木町通りで、今の興産館の前が機關車を廻轉させる場所であつた。驛の前に今ある噴水は、水道開通と共につくられた、之も亦日本最初の水道の噴水であつた。

瓦斯燈がともり、粹な人力車のある昔の横濱驛風景は、ほゞえましいものがある。



最初の瓦斯會社と瓦斯橋

六、最初の瓦斯會社

高島翁が横濱の開發文化に盡粹したことは數多いが、瓦斯の創業もその一つに數へられてよい。外人が瓦斯事業の許可を出願したといふことを聞いた翁は外人に經營させては日本事業家の名折れである同志を糾合して遂に翁の手で創業することになつた。現在の本町小學校の地で其前の瓦斯橋は事業にちなんで残された名である。明治五年九月、一部に點燈し市民を驚かしたものだ。七年三月畏くも 兩陛下臨御の光榮に浴したが八年、町會所に引繼ぎ次いで市に移つて瓦斯局となり今日に至つてゐる。

七、洋風の學校、藍謝堂

高島嘉右衛門翁の事業の一つとして明治教育史に止められる。洋風の學校、藍謝堂は明治三年中區花咲町五丁目に建設された。

此時代に修交館といふ文學所があつたが、役人の子弟に限られてゐたので之を遺憾として建設されたものである。一般に高島學校と稱へられてゐた。

次いで小學登槐舎が併設され之も實に小學校の元祖なのである。明治六年市に寄附したが翌年烏有に歸して了つた。

本校出身者に寺内正毅、本野一郎、都筑馨六氏等の名士がある。



高島學校舎々

八、野毛山の鐘

震災前まで野毛山で打出す鐘が横濱の時を報じてゐた。震災で傷ついた残骸は、今震災記念會館

の入口右手に保存されて昔を偲ぶ遺物となつてゐる。

どうした事情からか明治初年の頃、個人として時の鐘、建設を願ひ出るものが少くなかつた。役所では横濱町でやれと命じ費用を小間割で徴收鑄造した、音色が悪か



野毛山の鐘

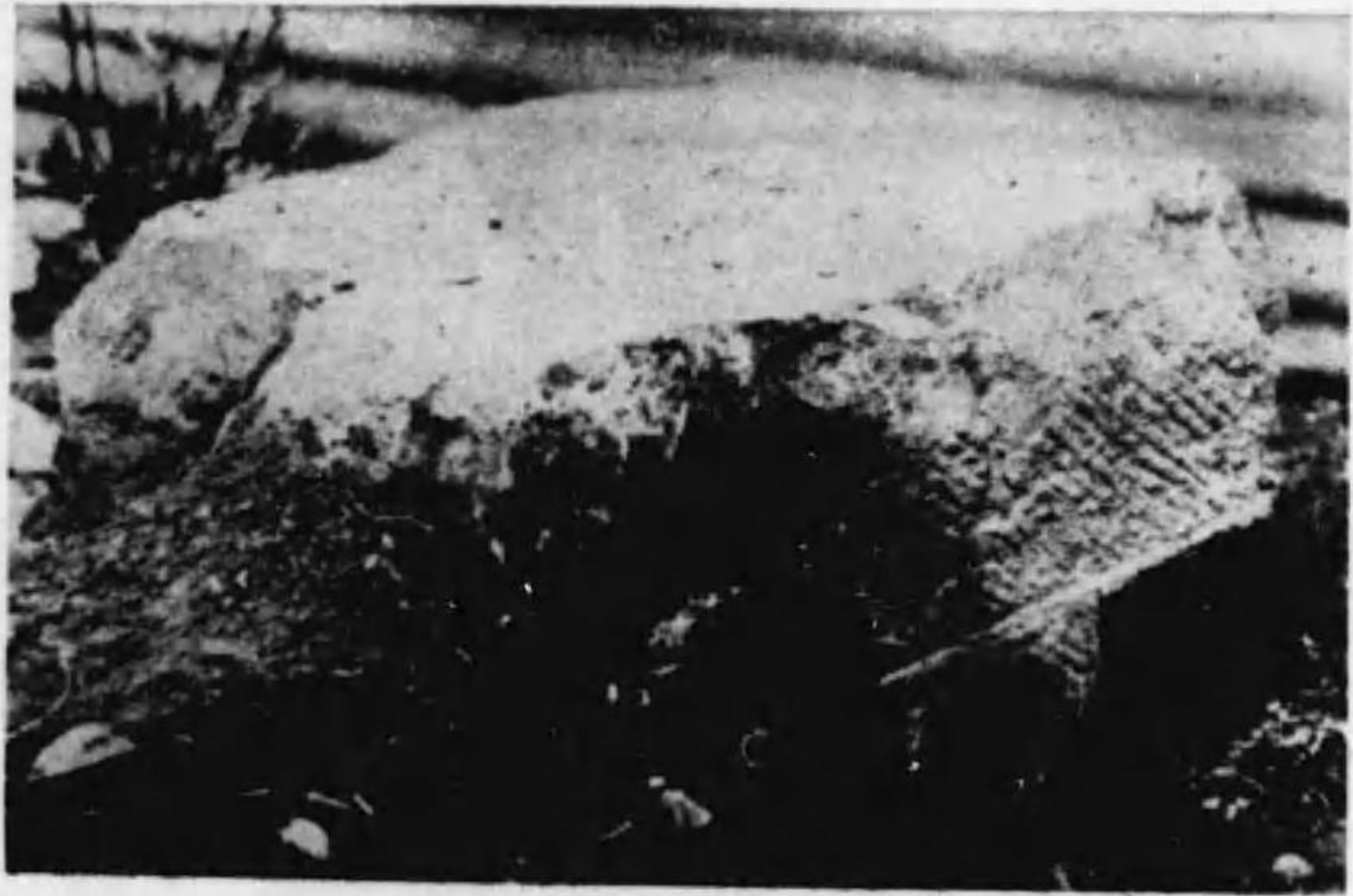
つたやら其他いろくの事情で取かへられ最後まで残つたのは保土ヶ谷在境本地藏のものであつた。

九、世界最初の金星観測

金星の観測には時と場所とを選ぶことが一番大切だといふ。明治七年十二月九日場所は地球上で日本の横濱が最適地と定まり、宮崎町三九野毛坂右丘上に大規模な観測所を設置した。

金星観測所としては蓋し世界最初のものである。

器械を据付けたといふ二尺四方位の土臺石が、今も横打彌太郎氏の庭内に残つてゐる。



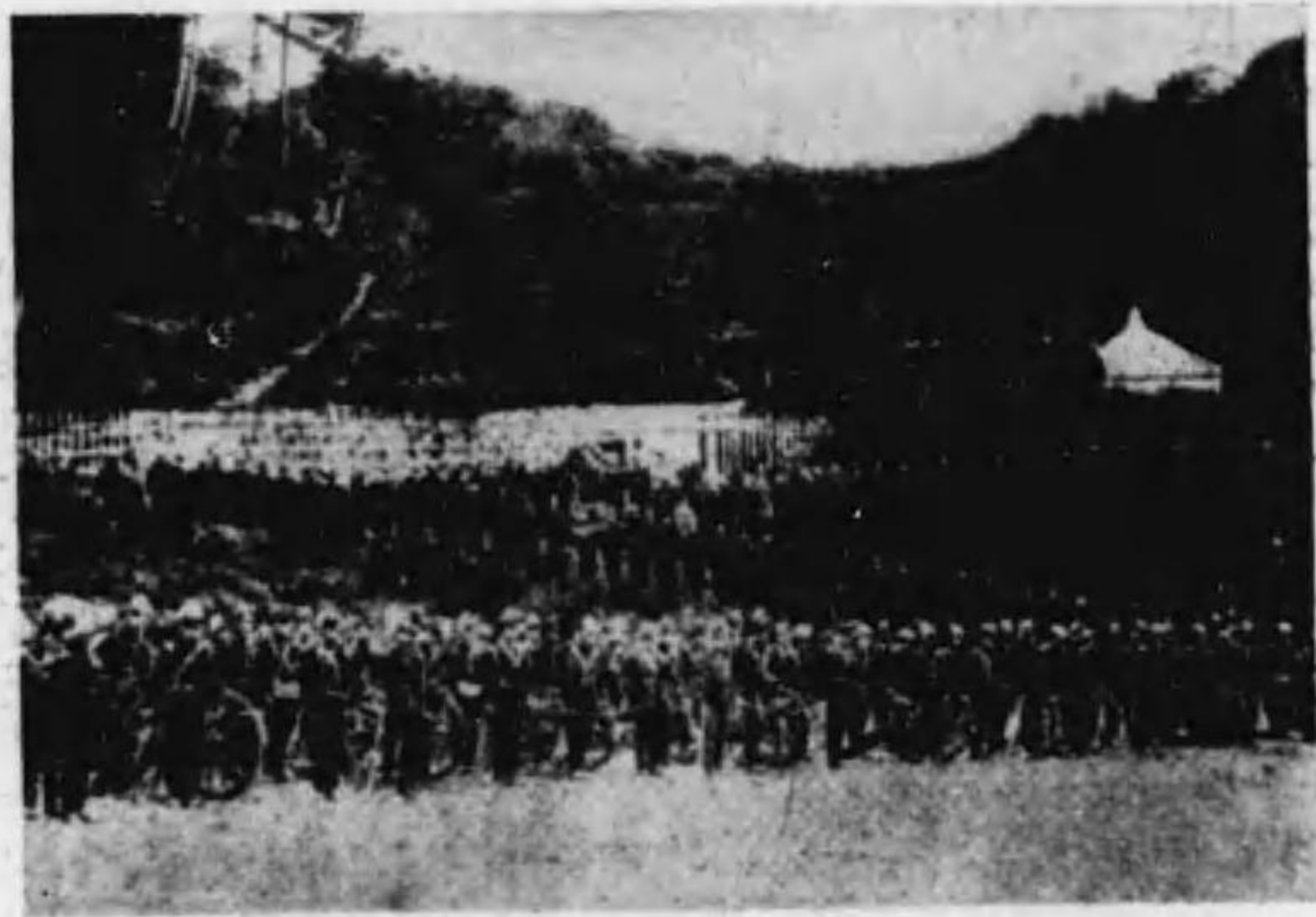
石臺土の所測觀

一〇、太田の陣屋跡

開港するときまつた安政六年五月、陸上警備の任に當る福井藩が太田村に陣屋を建設した。

地名をとつて太田の陣屋と稱されてゐたが現在の日の出町である。

慶應三年佛國式騎、歩、砲の士官養成所として三兵傳習所となつたが暫くして江戸に移された。その後は警衛に當る縣兵隊の本營に供されてゐたこともあつた。



鍊 調 式 洋

一一、落莫たる蒔田城址

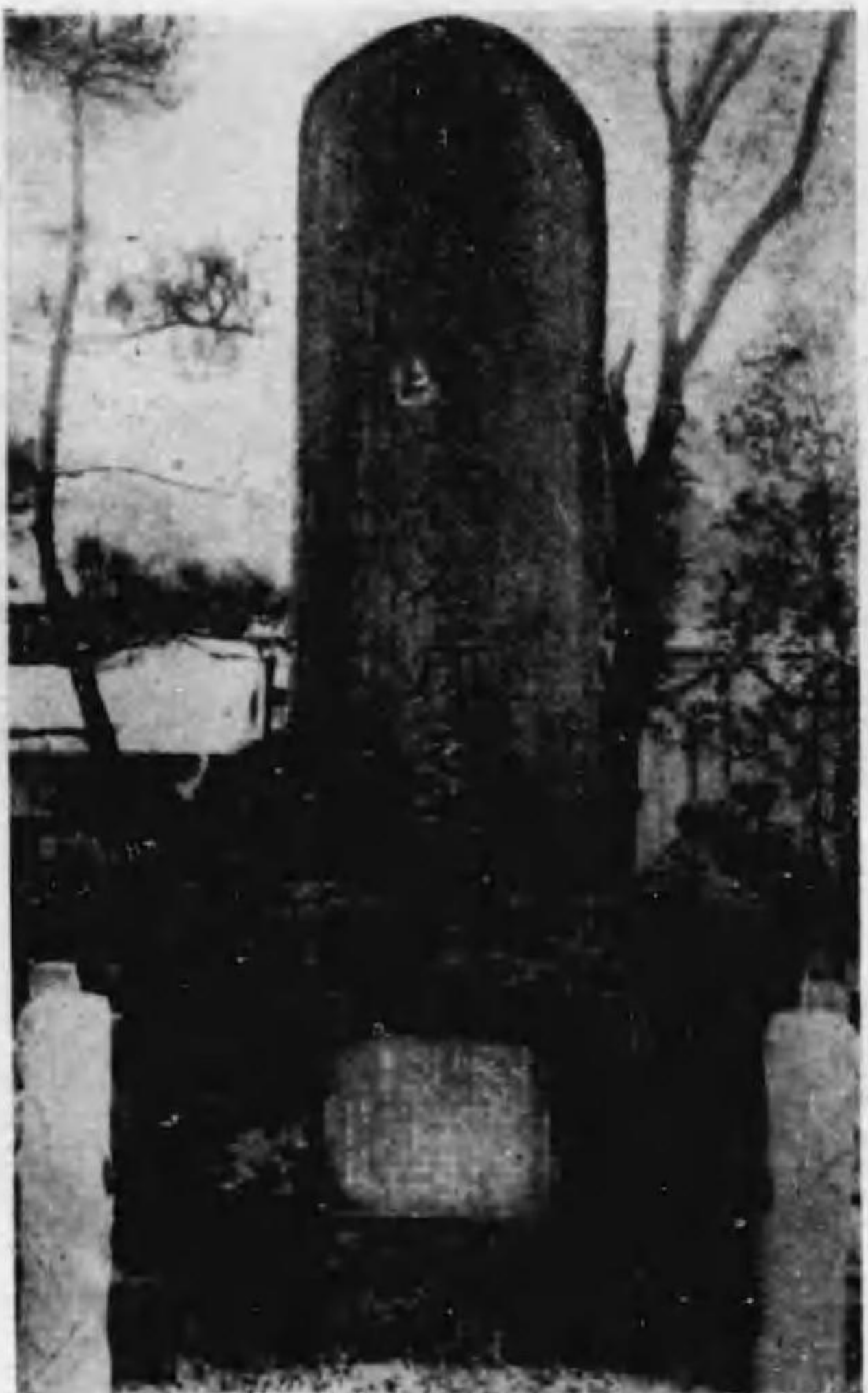
市電弘明寺線宮本町三丁目停留場から東へ數町、英和女學校のある一帯の小丘はむかし北條氏綱の女婿吉良左兵衛佐の居城であつた。後は谷、まへは削るやうな斷崖、さすがに要害の地と肯ける。小田原没落後吉良氏も此城をすて、武州世田ヶ谷に移つた。往時この地を城山と呼んでゐたものである。裏山の勝國寺に吉良氏の墓があるが、一城の主のものとは思はれぬほど、さゝやかなものである。

一二、神奈川臺場趾

黒船渡來で面喰つた幕府は無茶苦茶に海陸の防備を各大名に命じた。松平隠岐守(伊豫松山藩主)は安政四年神奈川に出張、警備につき同年砲臺築造に取かゝつた。藩費三萬兩を費して東西百二十間、南北百七十五間約八千三百坪高さ三丈の臺場を築造した、用土は權現山から人の肩によつて運ばれたもので完成を急いだ、め人夫を酷使したものだ。『死んでしまいか御臺場へ行かうか死ぬかましかへ土かつぎ』といふ俗謡で激しかつた仕事の有様が忍ばれる。今は舊態を失つたが神奈川漁師町地先がそれである。

一三、神奈川の聖蹟

神奈川區西之町一、石井本陣跡は今空地になつてゐるが、明治元年十月十一日畏くも 明治大



行在所の紀念碑

帝東京へ御遷都のみぎり、鳳輦をこゝに駐めさせられし行在所である。

其後、東海道を御通過の際二回もこゝに鳳駕を駐めさせられ、誠に由緒ある土地である。地元の青年團が記念碑を建設して永く後世に此地の由緒を傳へてゐる。石井は舊家で代々神奈川の名主で本陣を

勤めてゐたが今は横濱を去つて了まつた。同家では嘗て大帝が御手にとられ御鑑賞あらせられたといふ瀬戸製の置物を寶物として大切に保存されてゐる。

一四、石井本陣の御膳水

神奈川齋藤分二八七二番地私人の邸内になつてゐるが
玉を敷く清水の湧く井戸がある。

慶應の頃石井孫左衛門氏が發見、西之町の本陣まで鐵
管を敷設して飲料に供した。

蓋し日本水道の最初のものであらう。石井本陣に

明治大帝、英照皇太后が御駐泊あそばされたとき、此水を
御膳水として召されたので此ことがあつてから御膳水と
いはれた。



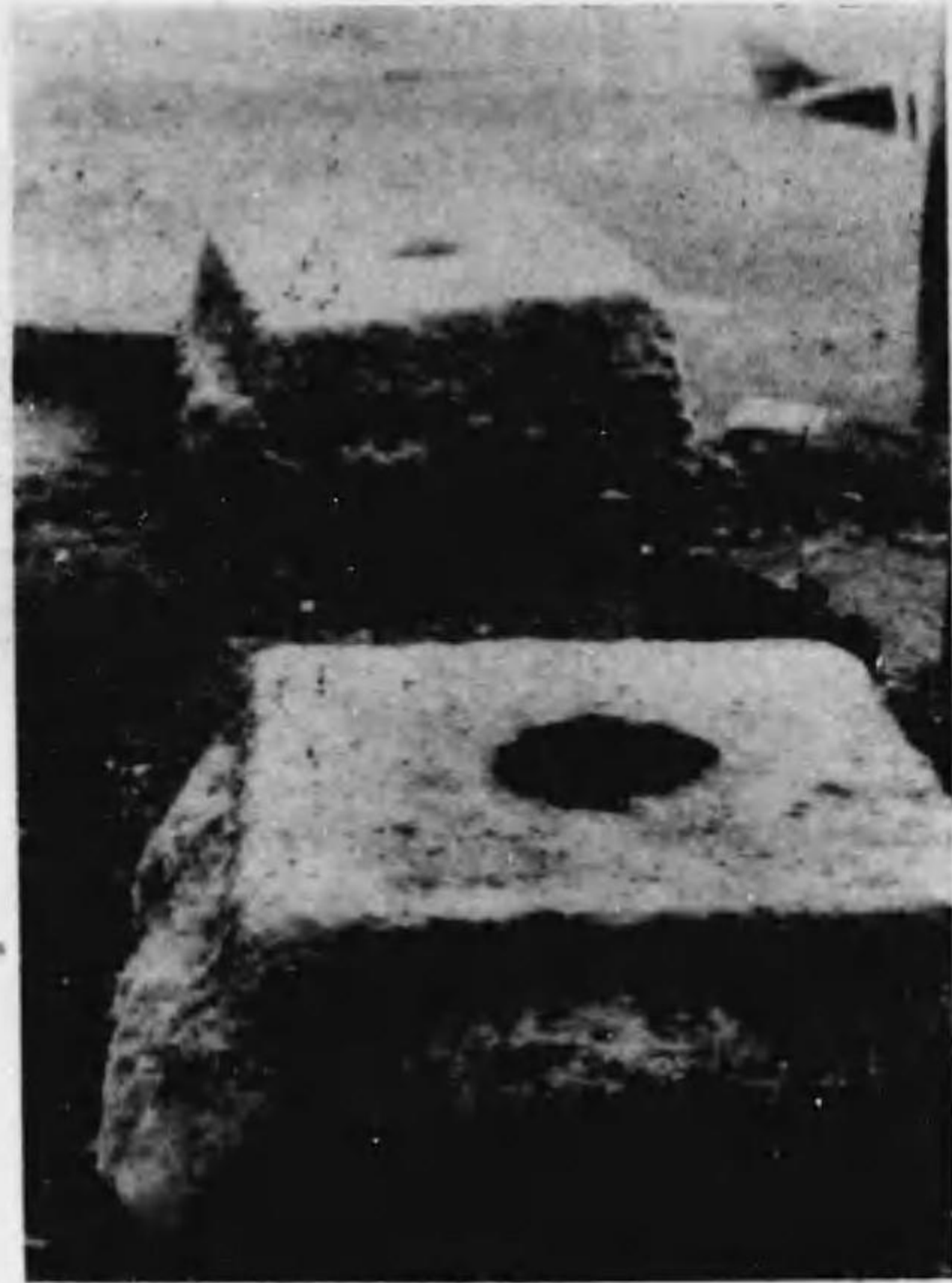
御膳水

一五、御殿町の由縁

足利時代に何人かの館があつたらしく堀越御所と稱へられたと口碑に残り、又當時の門の礎石と

稱される二尺四方位の石が御殿町八三
一番地に二個残つてゐる。

下つて慶長十五年、この舊地に將軍
御休泊用の御殿が造營され、寛永十一
年三代將軍家光公が上洛のとき宿泊さ
れた記録がある。御殿の總坪數三町三
畝二十一歩とあり可なり大きなもので
あつたらしい。僅か四十ヶ年に取壊さ
れ、今は舊跡をとゞめるのみである。



御殿の礎石

一六、幕政の慈悲、上無川

神奈川區神明町と新町の境界、國道を横切る小川、いまは僅か幅一間ほどの小溝であるが、昔この邊は入江で、満潮時には大川となり、暴風雨にでも會ふと渡ることのできない激流だったといはれる。

水源が定かでないので上無川といひ、又美、志の二字を略してかな川といひ、日本武尊の故事から金川ともいはれたなどの説があるが神奈川の地名はこゝから起つたものである。參觀交替などで江戸に入る日が遅れるやうな場合、増水してゐないでもかな川々止の證明を貰つて行けば咎められなかつたといふ。幕政は嚴格だつた中にも此慈悲があつた。



明治時代の橋の一部分

一七、生麥事件の遺蹟

生麥事變がもとゝなつて薩英戦争を惹起し、更らに一度開港した横濱を鎖港しやうなどゝいふ突飛な談判までやり出したほど面倒な問題であつた。時は文久八年八月二十一日薩州島津侯の行列が勅使を江戸に送つての歸途、當時の生麥村往還にかゝると、行列に無禮を働いたといふことから、警固の武士が乗馬の英人四名（内一名は婦人）に斬付け、一名は其場で落命、二名は辛くも遁れて本覺寺の米國領事館に急を告げたといふ事件である。其落命したりチャードソンの碑が市電生麥の終點にある。此碑の前から鶴見方面に走る舊東海道に當時を偲ぶ松並木が少し残されてゐる。



松山の生麥事件の遺蹟

一八、開港直後の領事館

開港直後の横濱は、まだ紫煙蕭條の一寒村だったので各國領事は神奈川の寺院を借りて公館に當てた。

アメリカ領事館 青木町臺町 本覺寺

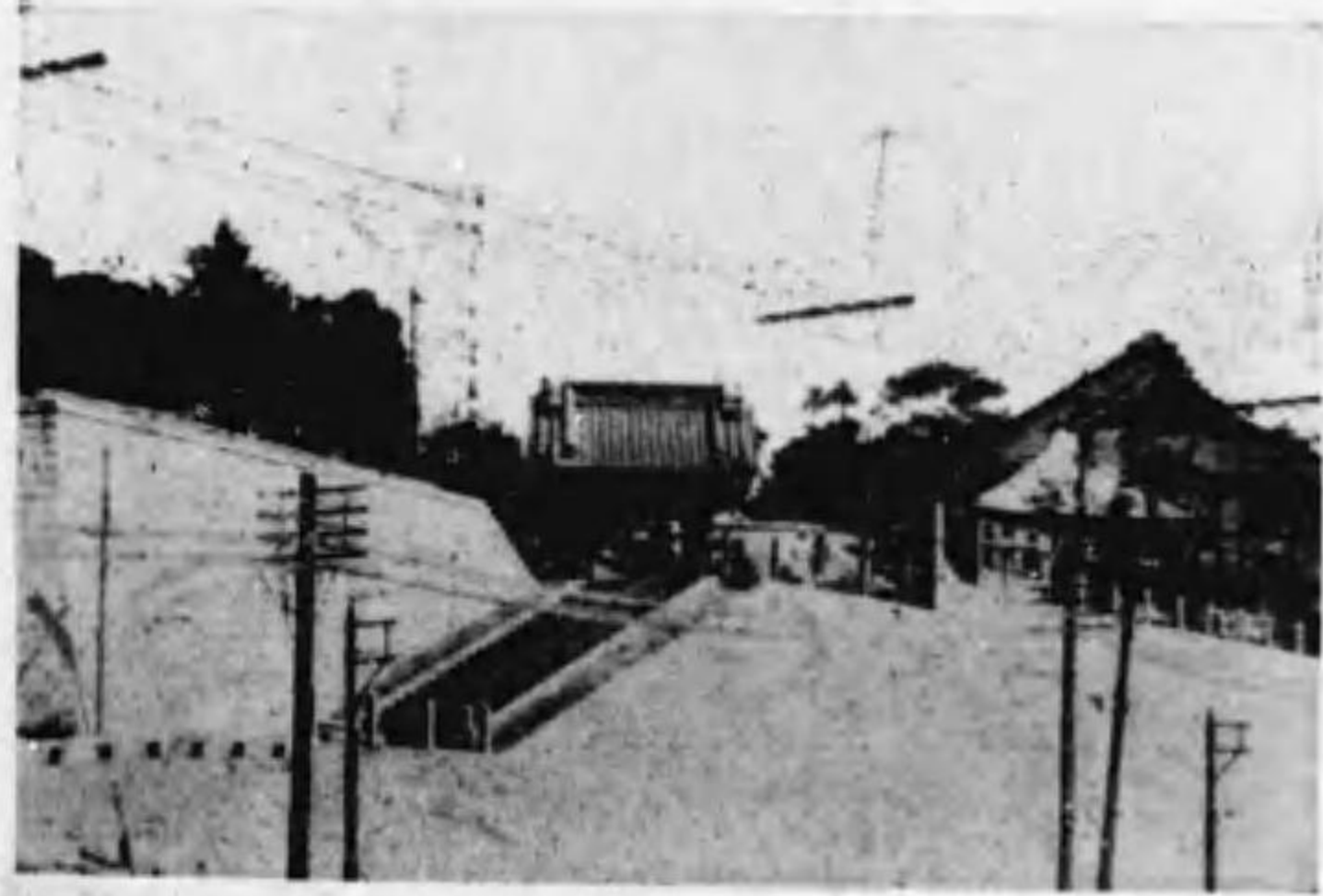
ハリスは第一着こゝに星條旗を掲げた。

生麥事件の難をのがれた一人が此寺に駈込み、急を各國軍艦に報じたといはれる。

イギリス領事館 春木町幸ヶ谷町 淨瀧寺

開港當時領事館に當てられた寺院で、當時の建物を残してゐるのは淨瀧寺だけである。

その頃のベンキが本堂の屋根裏などに残つてゐる。



本覺寺



淨瀧寺

フランス領事館 飯田町 慶運寺

領事手植の百日紅が二本残つてゐる。同寺は又浦島太郎の傳説があつて有名でもある。

フランス公使館 青木町元町 臺行寺
オランダ領事館 新町 長延寺



慶運寺

一九、へボン博士の偉業

神奈川區飯田町の成佛寺は新日本開拓の恩人へボン博士の宿所だつた。博士はキリスト教傳導の



へボン博士澤村田之助の足病治療

ため牧師として派遣されたのは開港の年の安政六年十月十八日である。神奈川に若くや日本語を研究、和英字典を著述した外ローマ字普及につとめた人であるが博士が日本人から畏敬されたのは眼病の施療であつた。博士は元來醫師で傳導や研究の傍ら附近の宗興寺を施療所とし、其後居留地三九番に住んでからも施療を

つゞけられた。三十三年の長年月を公共事業に盡瘁、使命を果して明治二十五年歸國したが、明治三十八年齡九十歳を迎ふるに當り、畏くも我 天皇陛下から勳三等旭日章を賜はり同四十四年九十六歳で昇天した。

二〇、古戰場權現山

今は住宅地になつてゐる神奈川權現山は四百年前の古戰場である。

永昌七年長尾爲景が蜂起したとき上杉高救の被官上田藏人は北條早雲と通じて謀叛を企て、この山に城砦を築りてサア来いと頑張つた、その頃この山は東から南にかけて麓まで大浪が打寄せ、北は幸ヶ谷から二ツ谷邊まで深い沼田が連り、西は僅かな堀割で飯塚山につゞく要害の地で上杉勢は二萬餘を以つて晝夜攻め通し、戦ひ二十日間に及び奮戦の甲斐なく落城した。

『神奈川の住民間宮彦四郎なり』と打出た話は此戦ひのときである。



權現山

二一、市場の一里塚

一里塚は『箕輪日記』永録四年の條に書かれてゐるから、その以前からこの制度があつたに違ひない。

東海、東山、中仙等の諸街道に一里塚を築かせたのは徳川家康の發案であつた。

鶴見市場町の舊東海道筋にコンモリ盛つた土饅頭の上に、太い橋の茂つた一里塚が残されてゐる。

菅笠に草鞋履きの道中姿を想ひ出させるこの塚も次第に數が少なくなつて行く。



市場の一里塚

二二、重忠奮戦の地

頼朝以後三代の將軍に仕へ源家の柱石といはれた畠山重忠が、北條義時の奸策に陥り元久二年六月十二日、別館菅谷（池袋よりの

東上線菅谷）を發して鎌倉へ出府の途中二十二日正午頃、保土ヶ谷區二俣川鶴ヶ峰に達したとき北條勢の迎撃に會ひ、一族郎黨百三十四人で數萬の大敵と奮戦した史蹟がある。

六ツ塚は重忠及一族郎黨の墳墓だといふものもあり、又先住民族



重忠の墳墓といはれる塚

の遺跡だともいはれてゐる。

二三、憲法起草の地

雪が降らぬといふ夏島は、伊藤公の『日本憲法起草の地』である。

明治二十年三月伊藤公は憲法起草のため都座をさけて金澤あづまの離座敷を借りて専心草案を練つてゐたが泥棒が入つて草案を盗まれた。草案は間もなく発見されたが危険だとあつて夏島に移つたのである。

夏島附近は今海軍の航空練習地になつてゐる。



あづまの離座敷

二四、金澤文庫の由來

金澤文庫は、初め北條時時が設けたのだが文庫とは云はず稱明寺と言つてゐた。昔の文庫の位置は稱明寺の後に洞門があつてそこを出たところだつたといふ。今そこを文庫ヶ谷と呼んでゐる。

北條九代記によると越後守實時金澤に住ひし後、稱明寺と號した、其子顯時から家名を金澤と稱し稱明寺に文庫を建て、和漢の群書を集めた。そして望みあるもの貴賤道俗たちまちつて學問に勉めた。

金澤文庫



當時支那は宋時代で貿易のため支那から船が來るごとに宋書を買つたとある。

昔の書籍は大部分散逸したが伊藤博文公の憲法起草の参考書三百餘冊を藏し更らに 今上陛下御大典記念事業として昔の文庫ヶ谷に縣費で文庫を再興した。



昔の面影を殘すハチス根

二五、保土ヶ谷の古事

六六

保土ヶ谷か程ヶ谷かといふので一時詮索されたことがあつた。保土ヶ谷といふ文字は小田原北條の文祿の頃に既に見えて居り、程谷は詩文などに用ゐられたものとされてゐる。その昔は郷名を幡谷と稱され榛谷に轉訛し平安中期から鎌倉時代にかけて榛谷御厨がおかれた。

御厨は神に供する御贄を献じて御厨の御用に供する土地をいふので神領の一種であつた、鎌倉時代榛谷四郎重朝の領するところとなつてゐたが、北條氏が畠山重忠父子を鶴ヶ峰で謀殺したのは重朝の勧めによつたものなどといふので三浦義村に討たれて榛谷氏は滅びて了まつた。

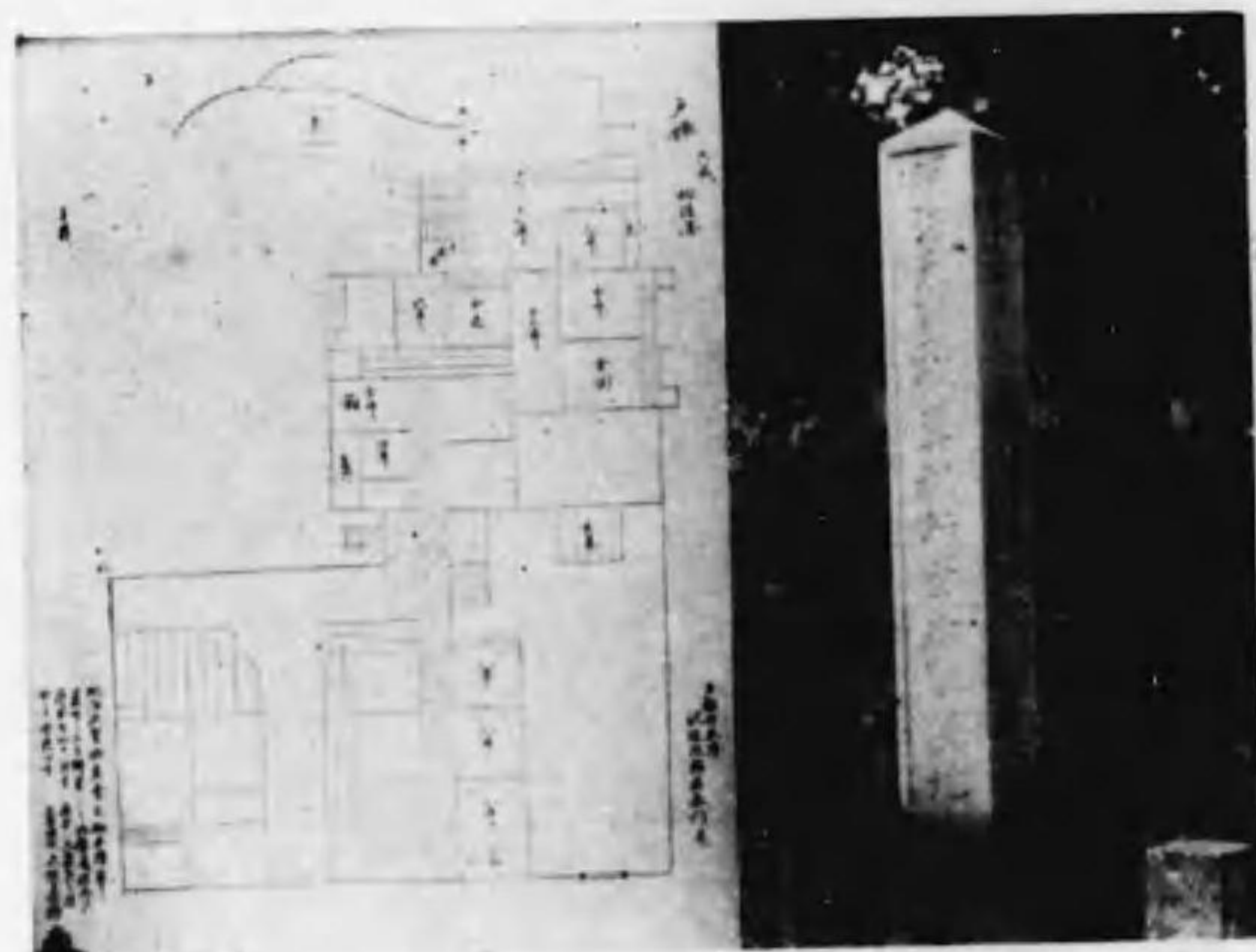
二六、戸塚の聖蹟

明治天皇御東幸のみぎり明治元年十月十一日戸塚に御駐泊遊ばされた、其ときの行在所は舊本陣澤邊九郎右衛門宅で（現戸塚區戸塚町三ノ四一四二）其後五度御小休所になつた他、皇后宮、皇太后宮の御小休所ともなつた。御膳水になつた井戸、井戸車などが保存されてゐる。

又影取町一七六の元西村喜平治宅、戸塚町一ノ四〇九二元安藤重右衛門宅、同町三ノ三九六一元江島文左衛門宅も 明治天皇、皇后宮、皇太后宮の御小休所にあてさせられた聖蹟である。

又戸塚四丁目の八坂太神境内には 明治天皇御東行のみぎり御内侍所を奉安せられた聖蹟である。

六七



右本陣の陣記の碑 左本陣の陣記

二七、『驛』戸塚

『戸塚』は東海道五十三次の一驛であつた。徳川氏入國の翌々文祿元年、内命があつて駄馬賃をとつて交通上の要驛になつてゐたが慶長六年置驛の際、その選にもれて了まつた。

しかし、古來のまゝ間の宿として従業してゐたところ慶長八年藤澤宿の郡代彦坂刑部元成が、傳馬を勤めず駄馬賃をとるのは不當であるといふ訴へが出て駄馬賃禁止の運命に直面したが、同九年驛馬を申請、許されて東海道の驛になつたのである。

戸塚は古くは富塚と書かれ慶長の頃から戸塚の文字が併用された。



時 昔 の 塚 戸

二八、見付と本陣

戸塚は宿驛となると見付が設けられた。江戸方の見付は明治年間撤廢されたが、上方の見付は舊



付 見 の 塚 戸

態のまゝ今も保存されてゐる。左右共長さ六尺八寸、幅四尺三寸、高さ三尺六寸の切石で築きたてゝあり、南側には赤松、北側には楓が植へられてあり、昔は貴顯高官の送迎を此處で行つ

た。大名の行列も、この見付から整へられたものであつた。

臺宿と中宿に二軒の本陣と三軒の脇本陣と平旅籠屋が七十五軒あつた。焼餅坂の焼餅で名高かつたものである。

二九、小机城趾

神奈川區小机町の西方根方が小机城趾である。飯田城ともいはれ創築は不明だが構造は小田原北條期のもので推定されてゐる。太田道灌が寡兵で攻略したので有名である。事の起りは文明五年山内上杉氏の家宰長尾昌賢が歿したので顯定は昌賢の弟忠景に家をつがせた。昌賢の子景春はこれを恨んで顯定を弑さんと道灌に謀つたが道灌は組せず顯定に忠告し又景春を宥めたがまとまらず道灌が駿河に行つた留守中、兩將對立して相武の地は戰雲をまきおこした。この騷亂鎮定のため景春のために起つた小机彈正左衛門昌安を十年四月道灌が攻めて落したのである。

小机はまづ手習の初めにて

いろはにほへとちりくゝとなる

と詠んで兵を激勵したと傳へられる。



小机城趾

三〇、飯田義家の館趾

戸塚區下飯田町の人家つゞきに東西百間南北二百五十間に亘る飯田五郎義家の館趾がある。城跡の形になつてゐて中央に中の丸があり下馬、道場口など、稱される地もある。堀跡の附近に富士塚といはれる小丘がある。明治三十四年中腹から古墳が發掘され鎌倉石で造つた五輪塔や納骨瓶が現はれた。飯田氏の墳墓と推定され、村人によつて『古賢大菩提』の石碑が建てられてゐる。又中田町の東方には石巻庸敬の館跡がある。

三一、舊中川の塚

戸塚區の阿久和岡津名瀬の各町、合併前の舊中川村には幾つも塚がある。鷹見塚は阿久和の西原野に點在し周圍二十間高さ一丈餘のものもある。鷹狩に鷹を放つたところだとも云ひ、鎌倉時代の物見塚ともいひ郷土の境だともいはれる。

岡津の島田塚は島田三郎の女丹後の局がこの地に住んでゐた。局が妊娠してゐたとき三郎は歸國することになつたので、鏡と守刀とを局に授け男子出生のときは刀を、女子出生のときは鏡を携へて歸國させよと言殘して行つた。生れたのは男子だつたので鏡は三島神社に奉納し刀を持たせて歸國した。塚は其折の胞衣を埋藏した地だといふ。

名瀬の八ツ塚は京田の丘上に五、六坪位の塚が八ツある。鎌倉時代、風間信濃守が戦死した遺物を埋めた塚だといはれる。

第五編

名所の巻



市ケ尾の横穴

三二、市ケ尾の横穴

落北區市ケ尾町の横穴が発見されたのは昭和八年だつた。地標高六十米内外の丘陵地でその中腹三十米内外の線に南又は西に面して十九戸の横穴が並列してゐる。中には口せまく奥の廣い袋状のもの又中央から稍奥部の左右兩壁より柱狀の凸起を刳出し下部に切込みをつくり敷石を簾め岩楔を打込んだものもある。一級二級の段を設けたものもあり多くは玉砂利を敷き天井には茶碗を伏せたやうな圓形の凹入をつくつたものもある。之等の横穴から骨片、直刀三振、刀子數十振、金環十數箇、玉類三百數十種、紡錘車等が出で一千數百年前の文化が物語られてゐる。

一、黒船と八王子の鼻

黒船が江戸灣に乗込んで来たので上へ下への騒ぎのとき異人が八王子の鼻に何か暗號のやうなものを書いた。勿論落書だつたに違ひないのだが、戦争の合圖とばかり江戸へ早馬が飛ぶといふ騒ぎをしたことがある。その八王子の鼻とは三溪園の手前から左へ數町老松のおひ茂つた山である、海に面した方は十數丈の斷崖絶壁、この頂上に八王子権現があつたが今は本牧神社に合祀されて、ない。この舊社地にある玉楠の根本に小さい祠があるが、これは附近に住んでゐた外人の一人息子が第一次世界戦争に出征し、所屬部隊は全滅したが不思議に唯一人生還したのは神の加護に相違ないと祠を祭つて日夜參詣してゐたといふ。



八王子の落書

二、砲壘だつた本牧の海岸

本牧の海は奇麗で海岸の風光もまた素敵である。海中に突出してゐる十二天の鼻は約三十米の孤峰、三方削つたやうな絶壁、脚下に昔を語りたげな潮がひた〜と寄せてゐる。茲に安政の頃、砲臺を築いたこともあつたが今は本牧神社の社域になつてゐる。

春は汐干狩に夏は海水浴に秋は觀月に四時家族連の人が絶へない。

三、數奇を凝らした三溪園

原家の庭園だが先代三溪翁が數奇を凝らし、そして一般に開放されてゐる横濱唯一の名園である。園内中央の小丘の上に聳える三重塔は聖武帝の天平七年山城國に建てられたもの、又建武二年楠正成が河内の觀心寺修理の時建てた西の宮、大石良雄が茶を樂んだ寒月庵や待春軒、京の嵯峨野にあつた横笛庵、鎌倉松ヶ岡の東慶總持禪寺の本堂であつた伽藍、こゝに後宇多帝の勅額が拜される。老松亭々たる中に見える屋臺は豊公が母天瑞院を祀るため當時の粹をあつめた聚樂邸中の村兩亭である。桃山時代の工藝美術を代表する當時の調度品が一切調へられて史實を止め又横笛庵の如き瀟々たる物語を偲ぶよすがもある、寒月庵附近の梅樹は橘樹郡御幸村に在りし日、明治十三年畏くも 明治大帝の叙覽あらせられたものである。

四、八聖殿と開港史蹟

本牧鼻の丘陵地、鬱蒼たる老松にかこまれ海に臨むところ、夢殿様式になる白聖の八稜堂、政界の長老安達謙藏氏が精神修養道場として建てた八聖殿である。

八聖殿
堂内には現代彫刻界の權威者によつて謹作せられた、聖徳太子の御尊像を中心として釋迦、基督、孔子、ソクラテス、弘法大師、日蓮上人、親鸞上人の八聖の像を祀り一般参拜者に開放してゐる。

この地は嘉永七年米艦渡來の時



鳥取城主松平相模守が陣屋を構へ山頂に望遠臺を設け外國艦の動靜を監視したところ、横濱開港史蹟の一つである。

五、盛場『ザキ』の昔

開港當時の關外は吉田新田の沼地であつた。吉田橋に關門ができて關内への出入が面倒になると

之れを嫌つた商人が關門外即ち吉田新田に商家をつくるやうになつたのが初まりで、明治六年頃今のやうな盛場の形をなした。これに骨をおつた合原伊勢守と佐々木信濃守との名をとつて伊勢佐木町と名づけられたといふことである。

今はハマ唯一の盛場で『ザキ』の愛稱で呼ばれてゐる。



今の伊勢佐木町

六、横濱三大公園

横濱公園……四萬人を收容する大野球場、音楽堂、武道館などがあり敷地面積二萬坪。

もと彼我公園と稱した。在留外人の希望によつて遊歩公園にしたのであつたが入園者を制限するなど甚だ面白くなかつた時代もある。

野毛山公園：

舊横濱の二大庭

園といはれた龜

善(原善三郎氏)

と野澤屋(茂木

惣兵衛氏)の邸



震災前の横濱公園



山下

園全部と附近の地を加へて出来た純日本式の大公園である。名だゝる庭園の老樹古木が点在し富士見ヶ丘に起てば眼界廣く富嶽も市街も一望の裡に收められる。



野毛山公園



公園

山下公園……港に臨む海岸公園、こゝは明朗な南國情調をたゞへてゐる。震災のときの焼土を集めて埋立てた市民の思出ふかいものがあるが潮風に吹かれながらの遊歩場として市民にも観光客にも喜ばれてゐる。

七、開港記念會館



會館の鐘

本町一丁目の角に天を摩する高塔のある煉瓦づくりの建物、いまのは三代目のものだ。初代は明治七年、石造二階建、屋上の高塔に大時計を据付けた。ほんとは町會所で今の市役所の役目をしたところであるが、市民は時計臺とも言つてゐた。後、横濱貿易商組合會館となり又横濱會館と改められたが、明治三十九年類焼して二代目は、同四十二年開港五十年を記念して建築され今の名に改められたが大震災で焼失、そこで三代目は大正十五年大修繕を施して出来、秩父宮殿下の台臨を仰いで新興大横濱の建設式を兼ねて開館したのである。今は階下に收めてあるが昔、塔上に吊てあつた鐘は初代以來の記念のものであつた。

八、震災記念會館

關東大震災!! これは涙の思出でもあるが又將來の誠めでもなければならぬ。

天災地變は避け難いものではあるが心がけによつては被害を避け得ることができないものではない。

斯うした二つの趣旨を以て、大正十二年の大震災當時の資料を主として蒐集し、震災記念館は設置されたのである。

出展のもの數千種、又郷土の資料となる數々のものも陳列されてゐる横濱の新名所である。



館内震災のマラノバ

九、掃部山と水溜

開港條約に調印して日本國中をアット言はせた井伊掃部頭直弼はそれから後、櫻田門外の雪を血にそめ其後消息を斷つてゐたが、明治四十二年銅像となつてゆかりのある横濱に姿を見せた。

掃部山の銅像



掃部山は元鐵道山と言はれ鐵道敷設當初、汽關車用の水溜があつた。

其後井伊家で買収、銅像と共に市に寄附したものである。除幕式には大分もめたが今では立派な公園となり殊に櫻の名所である。

一〇、情緒漂ふ南京街

る、本國の祭日を祝ふ獅子舞は名物の一つである。港に近い舊居留地山下町の一角に南京街がある。地名は山下町である。住するものは支那各地に亘るが比較的南方のものが多くが『南京街』と呼ばれるのは愛稱の一つで恐らく將來共にこの愛稱に親まれることであらう。



南京街

明治四年日清修好條約が締結されて以來往來するもの踵を接し日支貿易の華かだつたときもあつたが、今は青丹極彩の料亭が軒をならべ濃艶な支那情緒を漂はせてゐ



獅子舞



昔の袖ヶ浦

一一、臺町と袖ヶ浦

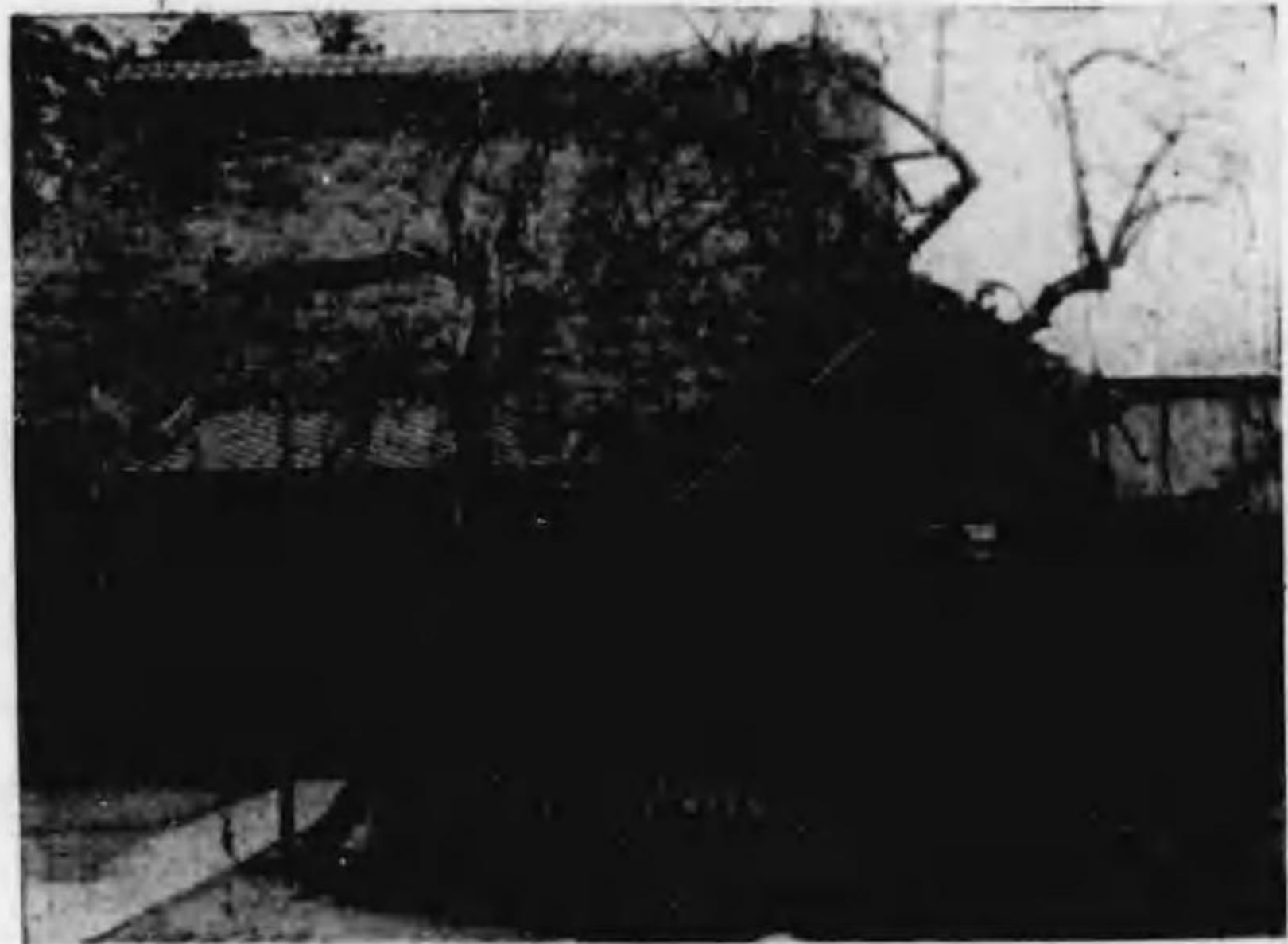
横濱に袖ヶ浦といふ地名は今はないが明治の初頃、今の鶴屋町附近は海で青木臺の根ぎはを小波が洗つてゐたものだ。そこを袖ヶ浦といはれ東海道の往還に旅客が足を留めた絶景の地であつた。烏丸大納言光麿卿關東下向の歸路、再び此地に足をとめ

思ひきや袖ヶ浦浪立かへり

こゝに旅寝を重ねべしとは

と詠じられてゐる。

臺町の街道には、清水が湧いてゐて旅客を喜ばしたものだ。芭蕉が『先づ呑んで手拭しぼる清水かな』と読んで居る。廣重の錦繪にも書かれてゐる。安政四年に建てた『沖荒れて猶照る月や岩の面』文政年の『華の雲富士より落ちて蔭寒し』などの詩石が残されてゐる。



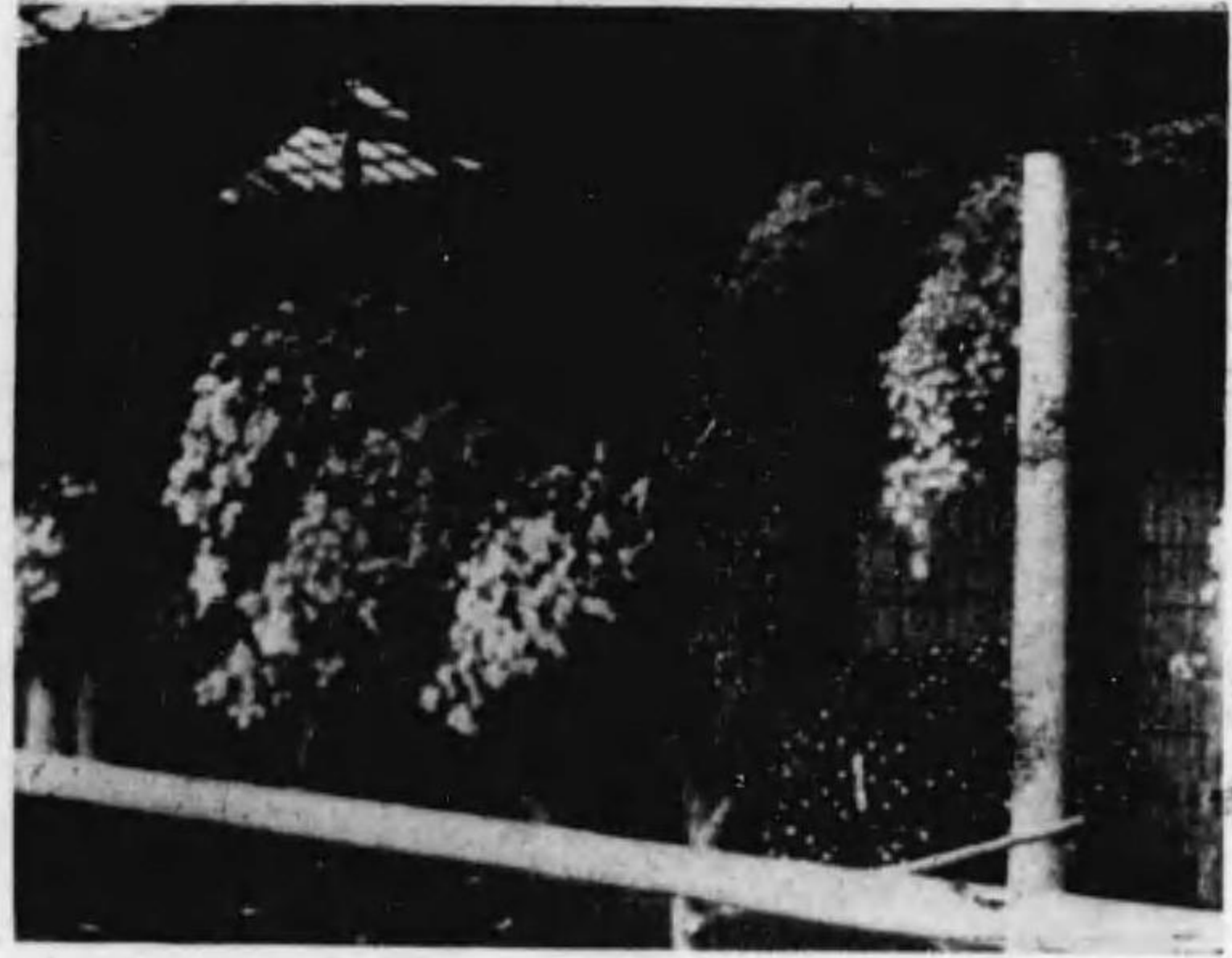
妙法寺と名木照水梅

一一、梅の名所杉田

『杉田の梅』の名で知られてゐる梅林の中に妙法寺がある。

縁起によると、此地に日本武尊、弟橘姫の馳水の傳説があるが、弘仁元年弘法大師が巡錫のとき、尊の靈蹟を敬慕し眞言の一寺を草創牛頭山と稱し後、文和元年荒井因幡守光善が薙髪し日祐上人の弟子となり妙法日荷と稱し堂宇を改修、日祐を開山として自ら第二世となつたとある。

境内には名梅が多く、英照皇太后、昭憲皇太后陛下御觀梅の聖蹟を止めてゐる。



中山邸の花園

一三、川和の名菊

横濱線の中山驛から十八町、毎年花期になると都人
士の踵を接する。

中山家の私園で百餘年前江戸の幕臣松浦某から秋菊
の苗二十餘種を譲り受け、主として菊經の所説を參酌
して新種育成に努力した。

明治十四年菊苗新種十二種を宮内省に献納し、今日
まで八十三種を献納したといふ。



綱島の桃畑

一四、桃の名所綱島

綱島は今、温泉地として有名になり大小の宿は四季客をた
まない。

ラヂウム含有の鑛泉が地下七十尺あたりから湧出してゐて
諸病に効ありといふ。

又桃の名所としても櫻時の花見場所としても名がある。

桃の頃になると菜の花が色彩つて一面の花毛壇、驛附近の
高臺諏訪の森から眺める光景は得難いものである。

桃は明治二十七、八年頃から栽培し此頃は年産四萬箱以上
にのぼる。

綱島の附近には大倉精神文化研究所がある。

一五、難所權太坂

保土ヶ谷町字元町から國道に分かれて右方に登る坂を權太坂といはれる。東海道の本道で昔はけ

はしかつたと見えて難所とされてゐた。

坂太權る残も今



ある。

元は一番坂といはれてゐたのであつたが、或時通行人が耳の遠い農夫に坂の名を問ふと自身の名を聞かれたと感じて權太だと答へたので權太坂になつたのだと傳へられる。

こゝから境木の地藏まで兩側に松の老木がならび舊街道の風情をのこして

一六、田谷の洞穴

戸塚區田谷町の常泉寺境内に洞窟がある。幅は三尺から七尺、高さは六尺から一丈八尺、更らに支洞がある。此延長七十九間餘、この地一帯が洪水と旱魃に悩まされてゐたので

部内の穴洞



龜の作名



郷民佐藤七左衛門が、横坑を穿ち湧水を求めて灌漑に利しやうと計畫し、自費を投じ村人の農閑を利用して天保十三年工事を起した。穿つて見ると土質が硬く且つ肌がよいので佛に關する彫刻を試みやうと工匠五名をして二十有餘年の永きに亘り永久二年やうやく完成させたものだといふ。

一七、金澤八景

世は移り變り八景の名は止めてゐるが其面影は薄らいでゐる。京極兵庫高門の和歌によつてありし日の景色を偲ぼう。

洲崎晴嵐

賑へるすさきの里の朝けぶり、晴れる嵐にたてる市人

瀬戸秋月

上る浪に瀬戸の秋風小夜ふけて、千里の沖にすめる月影

小泉夜雨

かちまくらとまもる雨も袖かけて、涙ふる江の昔をぞ思ふ



の重廣



景八

乙艦歸帆

沖津船ほのかに見しもとる梶の、おともの浦にかへる夕なみ

彌名晩鐘

はるけしな山の名におふかね澤の、霧よりもるゝ入あひの聲

平潟落雁

跡とむる眞砂の文字の敷そえて、鹽の干潟に落つる雁がね

野島名照

夕日さす野島の浦のほすあみの、めならぶ里のあまの家々

内川暮雪

木陰なく松にむまれてくるゝとも、いさししら雪みたと江のそら

一八、兼好法師の哀愁

金澤上行寺境内東の山の上に法師が住んだ庵があつたといはれる。兼好が金澤に来たのは花園天皇の元徳元年、歳は四十五歳だつた。

古びた焦茶色の法衣を着け、竹の杖に草履をはいてゐた。よく海岸を徘徊してゐた。

稱名寺の文庫に入つて宋版の外典を読み、正午になると懐中から糍を出して嚙りながら読みつゞけてゐた。或日、瀬戸橋を通りかゝると漁船が見知らぬ魚をあげてゐた。聞くと鰹だといふ鎌倉の武家衆が好んで食べるのだと聞いて『有難う』と云つたまゝ行過ぎた。

其頃三浦海岸は鰹の産地で遠く館山の漁師達まで漁りに来た。そのうちに漁區の争から血の雨までも降らしたことがある。兼好の海岸逍遙はそれ以來ぶつとりと止めて了まつた。後年の隨筆に鰹のことが書いてある。

近年鎌倉で鰹が珍重されてゐる。もとは立派な料理には用ゐられなかつたものだそうだが世情が變るとこんな下品なものまで貴人の膳に上つたりするものだ。

と、與謝野晶子さんの書いたものゝ中にある。流石の兼好も都戀しさのあまり斯うした歌を詠んでゐる。

さめぬれどかたるともなき曉の夢のなみだに袖そぬれつゝ

一九、戸塚の松並木

戸塚から舊大正村へ通ずる國道の松並木は東海道中に於て一といつても二と下らぬ風情を保つてゐる。其中に吹上の松、鶴の巢籠の松、清方の松、あぐらの松などの名木がある。震災前、東海道の擴張改修に當つて、伐るべきか残すべきか種々研究された結果道を左右の二筋につくり松並木を残し、つゞじ、秋草などを下植して美觀を添へ昔を偲ぶ記念物にしてある。

嘉永六年十一月二十二日松平誠丸の家來須藤隼太郎兄弟三人が父の仇細川山城守の家來原護を討つて本望を遂げたのは二番坂であつた。



戸塚の松並木

第六編 傳説の卷



爛漫たる櫻堤

二〇、柏尾川の櫻堤

九四

戸塚の驛から右手、大船の間近まで一里餘に亘り川を挟んだ櫻の堤、花の咲く頃は花見の客で堤上を埋めるこの堤には安政の昔も櫻を植えたと言書にあるが、何時の間にかその形跡を失つたので明治時代に至り一丁目裏から六丁目裏まで堤上に櫻を植えた。漸く見頃になつたとき明治四十一年堤防の改修で伐倒し、工事後植付けたのが今日の櫻である、與謝野寛氏が櫻時を斯う歌つてゐる。

春風や戸塚堤のさくらより

三味の音流る桑の畑にも

一、古事記に残る神松



神松

『それより入り辛まして、走水の海を渡りますときに、その渡の神浪を興て、御船たまたひて得進み渡りまます。こゝにその後、名は弟橘比賣の命の曰したまはく、妾御子に易りて海に入りなむ(中略)こゝにその暴波自ら伏ぎて御船得進みき。(中略)かれその坂に登り立ちて、ねもころに歎かして、吾孀はやと詔りたまひき。かれその國は阿豆麻とはいふなり』

神典古事記の悲壯にもまた優婉なる一

條であるが、日本武尊が吾孀はやの御歎きを洩させ給ふたといふ地は、杉田梅林の後山、牛頭山とそこに幹ばかりの老松が残つてゐて神松と稱されてゐる。弘仁二年弘法大師が巡錫のとき尊の靈跡を敬仰して神松の下に牛頭天皇を勧請したといはれる。

二、弘明寺の七ツ石

天竺の善無畏三藏と申す人が佛法弘通のため弘明寺に来て山中に七ツの石を加持した。

その石が今の境内に残つてゐる。

此石に不思議な話がある。石みづから顯はれたり、隠れたりして所在が定まらぬ。堂宇が荒れたりして修理の要があると顯はれて、金銀財寶が意の如く集まる。

寛永元年と明和三年観音堂再建の際に、この石が顯はれて現在の堂ができたのだと言はれてゐる。

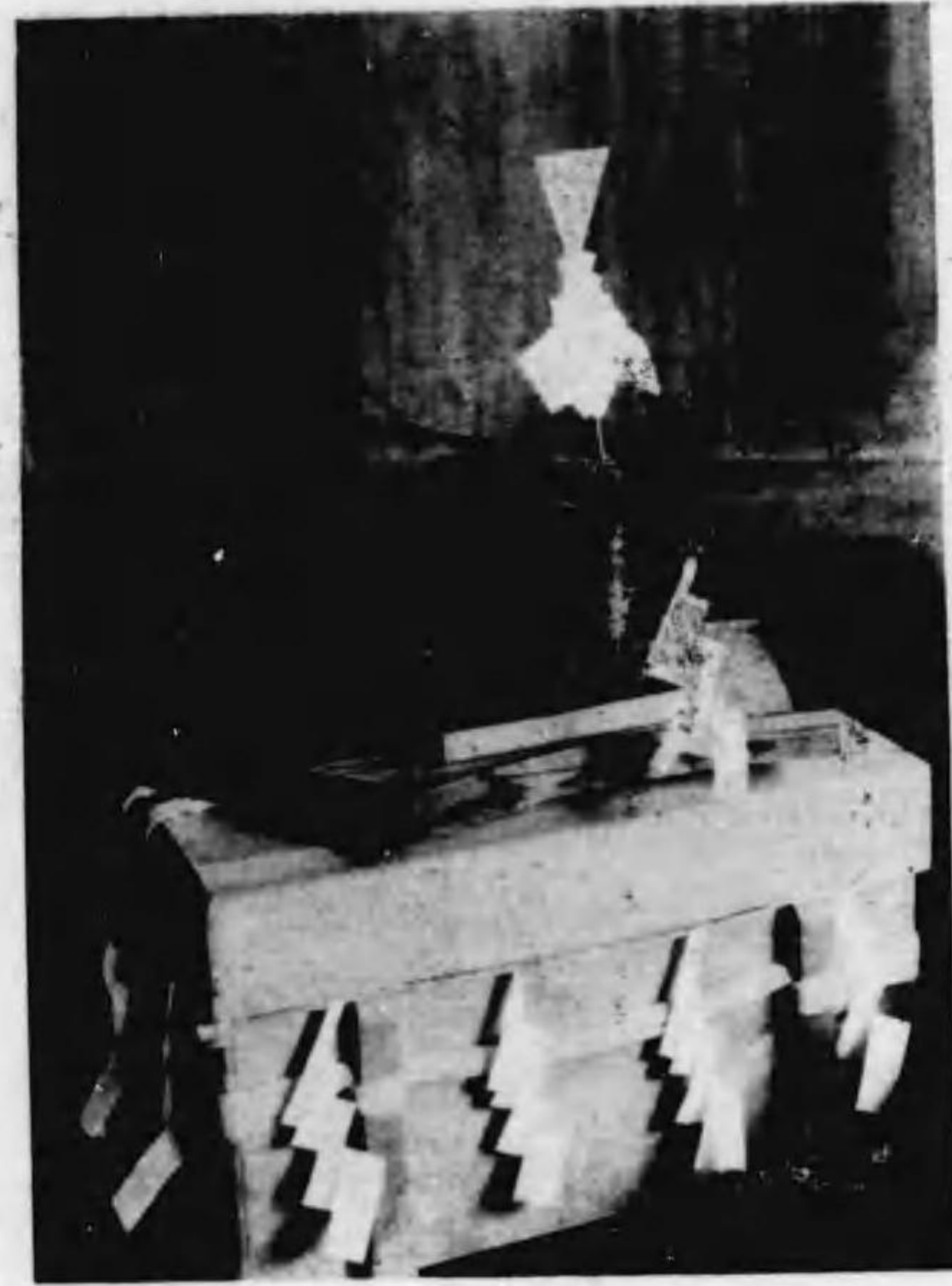
今は七ツとも顯はれてゐる。(弘明寺の項参照)



顯はれた七ツ石

三、本牧神社の御馬流し

本牧神社には『御馬流し』といふ珍奇な祭事があるが祭の日が定められてゐない。毎年八月中



御馬流し

の満潮時にやるといふのからして變つてゐる。祭の日になると氏子の牛込、原、宮原から三隻か五隻の船を出して氏子總代が社前に集まる。前以つて茅萱で作つた龜形の御馬といふものが供されてゐるが神官からそれを受取ると頭上にのせ金棒で人垣をわけながら海岸に出て船に乗る。船が五六丁沖合に出た頃、宮元からの合圖で御馬を海中



神祭

四、根岸八幡の神祭

根岸八幡宮の神の神輿は本牧神社の御馬流しと共に横濱に於ける古式な行事であつた。毎年八月十五日に執行されるのであつたが、先づ各字が順番で神の神輿を作る。その神輿は太さ二間四方高さ八、九尺重さ二百貫といふ素敵に大きなものである。若衆が長襦袢で神輿を擔いで海岸を練り、社前から海中に入る。やがて四、五人の若衆が神輿に乗り神の小枝を折つて海に流す、それは大漁を祈るためである。再び社前に歸り安置され、祭が終ると群集は一葉も残さず神をむしり取つて了まふ。悪魔除の守となるのであつた。

五、神奈川のお天気井戸

青木町の宗興寺の井戸は昔東海道を通る者が大井戸寺といへば誰れでも頷くほど有名であつた。



お天気井戸

直径六尺餘り深さ二丈餘あつたといふ。

二代將軍秀忠上洛の時、御茶水に用ひ

られた清水であるが、この井戸にお天気

井戸の名がある。

それは明日の天氣がよいときは水量を

増し、天氣がよくないと水量が減るとい

ふことである。

六、尼將軍化粧の井戸

尼將軍とは頼朝の室政子のことであるが、井土ヶ谷村は當時尼將軍の化粧料にあてられた地であ



化粧井戸

つた。

同町西向山乗蓮寺に將軍を祀つた堂

があり、乳の出ない婦人に利やくがあ

るといふことだ。

本堂裏に將軍化粧の井戸といふ直径

三尺位の井戸がある。

今でも清水が滾々と湧いてゐる。

井土ヶ谷の地名はこの井戸から出た

ものだといはれてゐる。

七、御所五郎丸の墓

御所山一七六番地御所の湯の入口にある墓石は御所の五郎丸の墓だと傳へられてゐる。五郎丸は



眞偽は不明だが墓は鎌倉時代のものである。

五郎丸の墓

富士の卷狩で夜討の曾我五郎時宗を抱きとめた勇士であることは誰れも知つてゐる。又一説には元寇の戦に蒙古勢を西の海に破つた大宰少貳資能と資經の祖武藏七黨の武藤氏のものであるといふ説もある。昔、豪族の館を御所と稱へたこともあるから御所山なる地名は名たる人の邸宅があつた事から起り、五郎丸と結びつけたのかも知れない。

八、上無川と御召縮緬

神奈川の名の起りといはれる上無川には、いろ／＼の傳説があるが、お召縮緬の名もこゝから起つたといはれる。徳川家康が上無川にさしかゝつた時、一人の乙女が川中で鰻を捕つてゐた。家康の目にとまつて近侍の者に呼寄せさせた。近侍のものは賤しき乙女だからと諫めたが家康は笑つて『世のものは行列を見やうとして業を休むものが多いのに彼の少女は眼も轉ぜず業にいそしむ奇特なものである。もし衣が穢ければ之を遣はせ』と召せられてゐた羽織を脱いで乙女に賜つた。その羽織は縮緬だつた。後世御召縮緬と稱された起りはこゝにあつたといふ話である。

九、『鶴見』の名の起り

鶴見橋の名は昔附近に野鶴が群生してゐて徳川家康、江戸入國の際、我世を壽くが如く舞ひ遊ぶ様を見て行列を控えさせた。橋の名を問へば『釣海橋』と答へたが同音の鶴見橋にかへよといはれたといふ説がある。しかし、仁治二年、元弘三年、建武三年、正平七年等の文書に鶴見と書かれてあり、鎌倉の初めこの名があつたから、家康との係り合ひは單なる口碑であらう。

10、境木の地藏

武藏、相模の國境、保土ヶ谷區境木に地藏堂がある。この地藏尊の傳説によると、昔、由井ヶ



境木の地藏

濱に打あげられた。地藏尊が大きいので動かせずそのままにしておいたところ、大水で海水に流され、今度は腰越に打上げられたが或夜漁師の夢枕に江戸へ行きたいといふお告げがあつたので、牛車で引出し境木まで來たら車が動かなくなり、一堂を建て、祀つたといふのである。脚氣に御利益があると、いふので毎年多くの患者が來るが、境

木一帯は縣下屈指の建康地でもあるといふことだ。

11、血櫻の由來

保土ヶ谷區境木に血櫻の名を傳へる老樹があつた。

寛文の頃、江戸神田鍋町に住まつてゐた浪人葛本無休が仲間七藏と火事騒ぎに俸の許に避難しやうとする途中、乗馬の矢橋作之進に七藏が突きあたつた、め落馬したので憤り無休を刺殺した。

無休の一子佐太郎は半歳苦心の上作之進が境木に隠棲してゐることを探知して切込んだ。

作之進が放つた手裏劍は佐太郎が身をかはしたので庭の櫻の幹にさゝつた。

作之進を胴斬にして目出度く本懐を遂げたが其血潮が手裏劍のさゝれたところから吸ひこまれ、

爾後其櫻は眞紅の花をつけたと。

渡邊霞亭氏の血櫻の由來に斯う書かれてゐる。

一一、照天姫の傳説

應永三十年常陸國の城、没落して小栗は三州へ落ちた。その子小次郎は關東に忍んでゐたが相州權現堂といふ所に行く途中、金澤で盜賊どもの集まつてゐる宿へとまつて了まつた。

盜賊どもは小次郎に眼をつけ毒酒をのませて殺さうと企て遊女てる姫に酌をさせた。

てる姫はそれと氣がつき、小次郎にも告げ自分も呑まなかつたが、家人は皆酔ひ伏せて了まつた。

小次郎はひそかに逃げて了まつた。酔ひ倒れた振りをしてゐた。

てる姫は川に流されたが、川下へ匍上がつて身をかくした。

小次郎は後來つて、てる姫に賞を與へ盜賊どもを誅伐した。

其子孫は代々三州に居住してゐたと鎌倉大草々紙にある。

又、漁師が漂流船の中に美しい女が失神してゐたのを助けて家においたが妻が嫉妬のあまり、夫の不在中松に縛つて松葉いぶしをしたなど、とも言はれる。

兎もあれ金澤には照小島とか照天松とか、てる姫にまつはるものが多い。

一二、入定塚の口碑

金澤小學校を出て海岸を左に行つたところ老松一

樹の根元に小さい塚がある。

入定塚といふ、傳説によると元祿の頃、傳海とい

ふ行者が地中に『ドウゴ』を埋めてその中に入り地

上に息通ひの竹筒を出して七日七夜鐘を叩き念佛往

生を遂げたといふ。

後、流行病除として參詣人が絶えない。



入 定 塚

(昭和十五年十一月十五日横鎮許可濟)

一四、義公と榎地藏

磯子區洲崎町の中央に榎がありその下に地藏尊がある。



藏 地 榎

(昭和十五年十一月十五日横鎮許可濟)

昔水戸義公諸國漫遊の際この地藏尊のまへを通つた。

その際從者が靈驗をたへたのを義公は嘲笑して海中に投げたが、歸國の後常陸の海岸に打上がつてゐるのを見て驚いて此地に運ばせ懇ろに祀つたといふ口碑がある。

一五、和泉の酒池

戸塚區和泉町には雌雄二流の不動瀧、雨乞池や酒池などがある。酒池には斯うした傳説がある。むかし池邊に孝子がゐて池の水を樽に汲みとつて父に飲ませてゐた。或日里人が樽を下げて來た孝子に會つた。何處から酒を買つて來たかと訊ねると孝子は此山奥の池水がうまい酒であるので汲み取つて父に飲ませてゐると答へた。里人は大いに喜び大樽に汲取り金儲けをしようとしたところ其酒は忽ち只の水になつてしまつたと

里人が孝子に會つたといふ橋を今も樽見橋と呼んでゐる。

一六、名馬鬼鹿毛の逸事

戸塚區俣野町に鬼鹿毛山、鬼鹿毛坂などの名がある。昔、鬼鹿毛と名付けた名馬を飼つてゐたところで其名が傳はつたものといはれる。

上俣野の鬼鹿毛山に飼養してゐた名馬鬼鹿毛が或日厩を逸出、逃走したが逃げる途中、暫、後を見てゐたといふ。其地を鼻返しといひ、鬼鹿毛の止まつた地の家(内海某家)を今もハナゲーと呼んでゐる。追捕しやうとして飼料の小箱を路傍に置いたが鬼鹿毛はそれを喰べて去つたといふ其地の小字を飼戸と稱し、又口が渴したので泉水のよどんだところで水を呑んだといふ其地を水垂と呼ばれてゐる。

一七、影取町の由来

横濱に合併されて影取町と改稱されたが、その以前は鎌倉郡大正村宇山谷城廻であつた。影取の名をとつた所以は今も残る舊東海道傍の池にまつはる傳説による。

その池に怪魚が棲み、毎日太陽が西に傾く頃、街道を通る旅人の影が池中にうつると、彼の怪魚は池底から浮びあがつて其人の影を取つて喰ふといふ。若しその厄に逢ふと必ず死ぬといふので恐れられたので、村人が或日人影を呑まんと浮びあがつたところを、鐵砲で射とめて人々の厄難を救つた。そこが鐵砲宿と稱され池から約三丁程のところである。



田と化し影取池

一八、松下公の名裁き

折本町に傳はる、地頭松下公の名裁き……

松下公が町奉行であつた時のこと町内で繼母が先妻の子を虐待したので其子が怒つて繼母を殺した事件があつた。

繼母の身内のものは其子を極刑に逢せうとした。

松下奉行は繼母の死體を掘出させたが時が経てゐるので骨になつてゐた。

そこで松下奉行は裁きを下した。

此骨は人間ではない畜生である。

人間なれば先妻の子と雖も無理非道はすべきでない、畜生が繼母に變化して非道をしたのである。

人間の繼母を殺したなら許すべきではないが畜生の變化を殺したのであるから此度は御慈悲でゆるして遣はす。と

一九、渡邊華山と荏田町

渡邊華山が江戸へ出府の途中、青山街道荏田宿（港北區荏田町）旅亭升屋に宿り亭主及同宿のものと酒盃を交はしたことが華山の游相日記に誌されてゐる。

隣にくさめする人あり、いかにととへば之も旅人にて我より先に借りて燈のもとにうづくまりたる翁、相州今泉といふ所のものにて地頭大澤二十郎どのへ用ありて江戸へ出るなり、今ひとり入來るは相模の山おくにする孫兵衛といふむくつけき男なり（中略）主人酒を買ひ肴をもふけ書畫を乞ふ

孫兵衛も今泉の佐右衛門も共々書畫を乞ひ發句をつくつたとある。



今 日 の 荏 田 町

第七編 起源の巻

一、國歌『君ヶ代』



林 廣 守 氏

現在の曲譜は明治十三年宮内省の伶人林廣守氏の作曲であるが、その起りは明治二年にさかのぼる。薩藩は洋式の軍隊を傳習せしむべく三十餘名の年少者を横濱に派し當時駐屯中の英國軍樂隊長ジョン・ウイリアム・フェントン氏に就かしめた。同藩の藩兵隊長川村純義、野津鎮雄氏等が練習生監督のため偶々横濱に出張したとき、英國軍樂隊が毎朝、國歌を吹奏して國旗を掲揚する莊嚴な有様に感激して、天皇陛下の頌歌を定めてはといふ議が起り詮議の結果古今集中の「君ヶ代」を歌詞とし、フェルトン氏に最初作曲させた。

日本語を解しない英國人の作曲であるから歌詞にそぐはなかつたので、後に林廣守氏が選譜したのである。最初は海軍が、天皇奉祝歌として採用し後、陸軍でも同様に用ゆることになり、次いで國歌として定められた。

二、天皇陛下に言上

古來、天皇陛下の大御前で一般臣民が言上し奉るなどは思ひもよらぬことで龍顔を拜することさへ叶はなかつたが明治五年、時の神奈川縣權令大江卓氏の努力によつて感激と喜びの途が拓かれた。九月十二日京濱間汽車開業式に御臨幸の大御前に市民の總代を參列せしめ原善三郎氏は恭しく祝詞を言上し奉つたのである。

此日新橋でも同様の開業式があげられたのであるが、東京市民はかゝる光榮に浴さなかつた。陛下に直接祝詞を奉る光榮は即ち横濱市民が最初に與へられたものである。

三、一般市民に拜謁を賜ふ

明治七年三月十九日、明治天皇、皇后兩陛下が横濱の燈臺寮に行幸啓あらせられたみぎり、高島嘉右衛門創設の瓦斯局へも御成り遊ばされた。そして進歩的事業御獎勵の大御心から、畏くも嘉右衛門に拜謁を賜ふた。一市民にしてこの光榮に浴したのは嘉右衛門が始めてである。嘉右衛門は恐懼、齋戒沐浴して大御前に、でやうとしたとき侍従長東久世伯は嘉右衛門の背が異様にふくれてゐるのを發見してとがめたが、それは逝ける父母にも今日の光榮をわけたいと靈牌を背負てきたのであつた。願ひのとほり父母もろとも天顏に咫尺し畏くも優渥な御沙汰さへ賜つて、御前を退下したのであつた。

四、國旗の掲揚

祝祭日に軒にはためく國旗の波、實にすがすがしい奉祝、奉祭の表徴である。その國旗掲揚の初めは明治五年九月十二日、京濱間汽車開業式當日、明治天皇には横濱に御臨幸を仰出されたのである。大江縣權令は未曾有のこの御盛儀を奉祝するにふさはしい方法を考へるやう達したので小野光景、島田豊寛、輕部悦選、岡本信行、梅田廣幸等あつまつて協議の結果、外國人が其國の祝日に國旗を掲げる例にならつて國旗を掲げ、日の丸の提燈を吊ることにしてはと稟申しそれに決定、當日の盛儀を祝した。

五、近代陸軍の訓練

我國の近代陸軍の搖籃期ともいふべき『三兵傳習』のことは横濱開港後幕府によつて行れた。文久二年幕府は舊來の軍制を廢し洋式にならつて歩、騎、砲の三兵を編成したが一定の規律がたゝなかつた。そこで慶應元年陸軍奉行小栗上野介と陸軍御用取扱淺野美作守とが佛國公使に教師斡旋を依頼し、一方陸軍總裁に上申して決裁をうけた。そして太田の陣屋を兵舎に當て一萬八千餘兩の建築費を出して準備を整へ、慶應三年正月から訓練を始めたが八百名の三兵を訓練するには陣屋の構内では狭いので、ついに騎兵は五月十日、砲兵は同十一日江戸深川越中島駒場野操練場に移つた。間もなく歩兵も移轉したが横濱が濫觴である。

六、軍隊のラツパ

三兵傳習所で訓練中佛國の教師は日本古來の鐘、太鼓、法螺貝などでは不便だといふので歩兵の中から三十二人を選んでラツパ吹奏を教授した。それが我國の軍隊にラツパを使用した初めであるが譜は佛國のもので今日のやうに勇壯なものではなかつた。昔は太鼓打は身分の低いもので羽織の着用を許されなかつたものである。三兵傳習に應募したのは皆百姓、町人だつたがラツパ手になつたものには苗字帯刀を許し特別の待遇を與へたものだつた。

七、我國に於ける禮砲

外國に對する儀禮交換の禮砲については安政四年頃、外國公使から幕府に交渉があつた。當時の役人中には『禮節の強要を受けるのは彼に屈從するものであるから我國古來の儀禮を以つて押進むべきである』といふ強硬論もあつたが、『開國の上は各國體の儀禮に副ふは自然の勢ひである』との論が勝ちを占めて禮砲の制が定められた。禮砲を使用したのは文久元年米國公使館員ヒウスケンが江戸で浪士のために殺害された事件で英、佛公使が横濱から江戸へ歸府するに際し神奈川臺場で二十一發の禮砲を打つたのが最初である。

八、鐵道開通の頃



鐵道開通當時の櫻木町驛前

ペルリが幕府に進献した蒸汽車の模型を試運轉したときは當路の役人達おどろきの眼をみはつたものだ。明治五年五月七日、横濱品川間の鐵道が開通し九月十二日 明治天皇御臨幸の下に開通式が舉行された。各村々への通達によると——表示の時刻より十五分前にステーションに來り切手買入其他の手都合をなすべし——とあり、之に對しジャパン、ヘラルド紙、横濱毎日紙等は十五分前來り待つべし——との布告は無益に時を費さしむるもので鐵道掛の役人は時刻の貴ぶべきことを知らぬと抗議し又神奈川の漁師達は響きに驚いて魚族が逃げるであらう海邊からはなれたところに布設して貰ひたいと嘆願してゐるなど何日の時代も世論は面白い。

九、光榮に輝く燈臺

條約に基いて幕府は慶應二年洋式燈明臺の建設を企圖したが、王政復古となつたため其儘となり



最初の燈臺

世は明治となつて元年六月英國から技師を招聘、同二年一月現燈臺局の位置に燈明臺を、又同十一月燈臺船戒照丸が竣工して本牧沖に點燈を見たのを嚆矢とする。燈明臺局は最初木造だつたが明治七年煉瓦造に改築され、新回轉燈器を裝置し三月十八日點燈した。此日 明治天皇、皇后兩陛下には親しく行幸啓あそばされて天台覽の上同夜は伊勢山離宮に御駐蹕遊ばされ、神奈川臺にて燈光を觀覽あらせられた。

一〇、かねの橋由來記

馬車道から伊勢木町へ通ずる橋の本名は吉田橋であるが『かねのはし』といふ方が通りがよい。

明治二年に架かつた日本最初の鐵橋で燈臺寮御雇技師英人リチャード、ヘンリーブラントンの設計になるダブルウアーレン式で、幅二十尺長さ八十尺、當時横濱の名物として錦繪にまで刷られたものだ。橋の上にたつた見物人が欄干を叩きながら——近頃鍋釜が高くなつたのも道理だ——と驚嘆したほどである。年へて腐朽したので明治四十四年、鐵筋コンクリート橋に架替へた。桁式コンクリート橋は宮城縣の廣瀬橋又拱式コンクリート橋は横濱の吉田橋が我國で最初のもの、石橋博士の設計だが初めてのものなので不安がり縣會で危く否決されやうとした。その橋は震災で潰れ今のは新装を凝らした二代目のコンクリート橋である。



昔のかねの橋

一一、從軍看護婦

慶應三年房總でたゝかひが起り、官軍の兵力不足が傳へられた。上總の醫師松井一氏は横濱に出て西洋醫術を修めてゐたが、それと聞くや官軍に馳せさんすることになつた。妻女謹子さんは横濱のもので松井に嫁してゐたが傷つく人々の看護なりともしたいと雄々しく夫と共に参加し、寢食の暇もなく戦傷者の看護につとめた。不幸松井氏は敵弾に斃れ謹子さんは横濱に歸つたが辨天境内の假病院（これは我國陸軍病院の始め）に願をして引つゞき傷病者の看護にあつた。

我陸軍で看護婦を採用したのは日清戦争のとき廣島の豫備病院に採用したのが始めてである。一個人の發意ではあるが横濱の人松井謹子さんが從軍看護婦の先端をきつてゐる。

一二、外國人との結婚

慶應三年五月、英國領事から神奈川奉行へ書翰で、外國人と日本人との婚姻を禁ずる法ありや、との談判が來た。奉行水野若狹守は前例がないので幕府に稟議した結果、——爾後條約國は其儀無差支、尊卑の別なく双方の出願により許可の上は婚儀を整ふべき——旨の返答をしたが、公式に雜婚を認めた最初であつた。其まゝで暫く經過し明治六年三月太政官三百三號で正式に布告された。

一三、野球の國際試合

野球が我國に渡來したのは明治六年、鐵道寮の技師平岡熙氏がアメリカから歸朝したときバット一本とボール三個を持つて來て新橋驛に勤めてゐた同好者が俱樂部を組織したのが始りだが、國際試合は明治二十九年五月三日横濱公園で行はれた。當時の東京第一高等中學校對在濱外人アマチュア俱樂部との試合が嚆矢である。二九對四で一高の大勝に歸したがユニフォームは外人側の物々しいのでたちに比べて學生側は首縮の脚絆に素足であつた上に捕手を除いて皆素手であつたものだ。

一四、潜水作業の始

沈没艦船の引揚作業は今日我國の技術が世界に冠絶してゐる。その始めは慶應二年、横濱港内で英國の彈藥船の船底修理に横濱在住の増田萬吉が英國軍艦からゴム衣潜水器械を借受けて邦人々夫を使つて成果を収めたことに始まる。萬吉は後東京の工作局に依頼して日本製潜水器械を製造、蘭人について潜水術を習得、艦船の引揚、岩礁の破碎、架橋及海藻魚介の捕獲に従事し、三十餘年本邦潜水業に盡力した。水戸沿岸で潜水器械を用ひ鮑地を發見したのは明治十年、當時八百貫の捕獲をしたと言はれる。

一五、テレグラフの話

電信機は蒸汽車の模型と同じくペルリが進献したものが始まりであつた。今の英國領事館の地から馬車道の地まで電線を引いて試験をしたのが濫觴である。斯くて十一年の後明治二年英國から通信機が到着し、燈臺局と裁判所の間架設して試験の上同年九月神奈川縣裁判所(今の縣廳)と東京築地明石町の運上所との間に架線、十二月二十五日から通信取扱を開始した。舶來機を改造し時計の文字盤に似たいろは四十八字が書いてある。發信機の鍵を回轉すると受信機の文字が針を指すといふ幼稚なものだつた、電信機をテレグラフ(定連雅樂府)といひ、線系の役人は陣笠姿で馬に跨り電線を見廻つたものだ。



最初電信機

一六、邦字新聞の發行

新聞紙の體裁をしたもので邦字で發行されたものは慶應元年五月ジョセフ、ヒコ(濱田彦藏)の海

外新聞が濫觴とされる。

明治二年二月新聞紙條例が頒布され翌三年

の末、活字と西洋紙とを用いたものゝ元祖、

横濱新聞が發行されて新聞界を驚かした。

明治四、五年頃までは在來の木版刷であり



開新外海

大きさは大型で半紙二つ折小型が美濃半截二つ折りのものが多かつた。

一七、天沼のビアザケ

ビール瓶を真綿に包んで珍重がつたが、麥酒は又魔法の水だと稱されたものであつた。明治五年英人ダブリュー、コーブランドは山手天沼の山腹(中區山手町)に良泉が湧出するのを見て麥酒醸造所を建設した。この『天沼ビアザケ』は英國駐屯軍に需要され、又外人との交際場裡に常用され好評を博した。明治六年甲府の人野口正章に醸造の秘訣を説き、コーブランドは輸出に努めた。横濱産のビールが海外に不拔の基礎を築いたのは此故である。

一八、牛鍋の流行

獸肉の食用は我國にも絶對なかつた譯ではない。舊幕時代は藥喰ひなど、稱して寒期には食膳に上せてゐた。しかし一般は之れを除けて大名行列の如きも、いんぢ屋の前を通るときは駕籠を高くさしあげて通行した。扱て横濱で牛肉店が開かれたについて、古老の話によると——文久二年今の住吉町五丁目邊に居酒屋の伊勢熊といふのが牛肉店を開かうと妻に相談したところ、強硬に反對されて果ては夫婦別の話までにもなつたが仲裁する人があつて一軒を二つに仕切り亭主は牛鍋屋を受持ち妻君は飯屋を擔當して開店すると千客萬來の盛況、つひに妻君も我を折つて中仕切の羽目を外して了まつたといふ笑話がある。

一九、種痘と證明書

明治三年十一月横濱地方に悪性の天然痘が流行し小兒の命を損ふものが多かつた。

英國公使の懇請があり、神奈川縣廳は早速英國醫師ユートンを監督とし邦醫、早矢仕有的、松山棟庵に命じて市内三ヶ所に種痘所を設け、生後七十五日以後の小兒にことごとく種痘した。これが官設種痘所の始めて漸次一般に及ぼし後、該事務を十全醫院の種痘本局に移したが種痘済のものには證明書を與へた。

この證明書交付も本邦の嚆矢である。



種痘證明書



瓦と場焼瓦

二〇、洋瓦焼と水道

市營元町プールは水道の水と、あの谷戸から湧き出す清水とを使用してゐる。

明治初年あの谷戸は佛人ジラードが瓦を焼いたところである。

之が日本で煉瓦と瓦を焼いた最初である。

又谷戸から清水が湧出するのでジラードは鐵管を敷設し船舶用水を供給したこともある。

此附近の丘上は開港後各國で屯營を設けて居つた舊地である。

二一、乗合馬車と人力車

外人が馬車を驅つて居留地を乗まはしてゐるのを馬ひき車などと呼んで驚異視してゐたものだつたが、慶應三年本町から吉田橋に通ずる馬車通路が竣工（今でも馬車道の名がある）同年秋、外人の馬車會社が許され京濱間を往復した、賃銀は二弗だつたといふ。

邦人としては寫眞術の先驅者下岡蓮杖が出願し、京濱の出願者を統合して後藤象二郎等と明治二年五月から營業を開始した。

人力車の發明者泉要助は横濱で馬車の輕快に馳驅するのを見て、人力車の發明を思ひたち幾度か改良を加へ試験の上明治三年三月許可されて營業を開始した。人力車發明に對し御下賜を辱ふし遺族も賞賜されてゐる、專賣特許も出願したがこれは收得できなかつた。



昔の人力車

第八編 歌謠の卷

一、大津繪節『雨の夜』

雨の夜に、日本近く、寝呆けて流れ込む、唐模様、黒船に乗込み入る人、大筒小筒を打ち並べ、羅紗猩々緋の筒袍袴袴、黒人坊は水底仕事する、大將軍は部屋に構へて、眞面目顔、中にも髭の長いジャガタラ唐人が、海を眺め、銅羅鉢叩いて、キクライ〜、キンニョ〜と、貫ひし大根土産に亞米利加指して歸り行く。

作者は當時風流老中として有名だった井伊大老の僚友越前鯖江の城主間部詮勝だといはれる。嘉永六年六月三日米船が浦賀沖に投錨した。二日から三日の朝にかけて浦賀は雨が降りそのあと霧が深かつたといふ。全文侮蔑的の意味を盛り日本人の意氣を見せてゐる。この『雨の夜に』幕が切つておとされ、開國日本の劃期的歴史がくりひろげられたのである。

二、流行歌『野毛の山からノエ』



横濱演跡

野毛の山からノエ、野毛の山からノエ、野毛のサイ〜山から、異人館を見れば
お鐵砲かついてノエ、お鐵砲かついてノエ、お鐵砲サイ〜かついで小隊進め
オツビキヤリコノエ、〜

安政六年六月二日、御貿易場として横濱港が生れた。文久二年生麥で英人四名の殺傷事件が起り國際關係が悪化し英國は赤隊、佛國は青隊が居留民保護のため駐屯した。そして示威的に兵を練つたものだ。それを野毛山から眺めてつくつたものであらう作者はわからない。

三、横濱市歌

我日の本は島國よ

朝日輝ふ海に

連り嶋つ島々なれば

あらゆる國より船こえ通へ

さらば港の數多かれど

此の横濱に優るあらめや

むかし思へば苦屋の烟

ちらりほらりと立てりし處

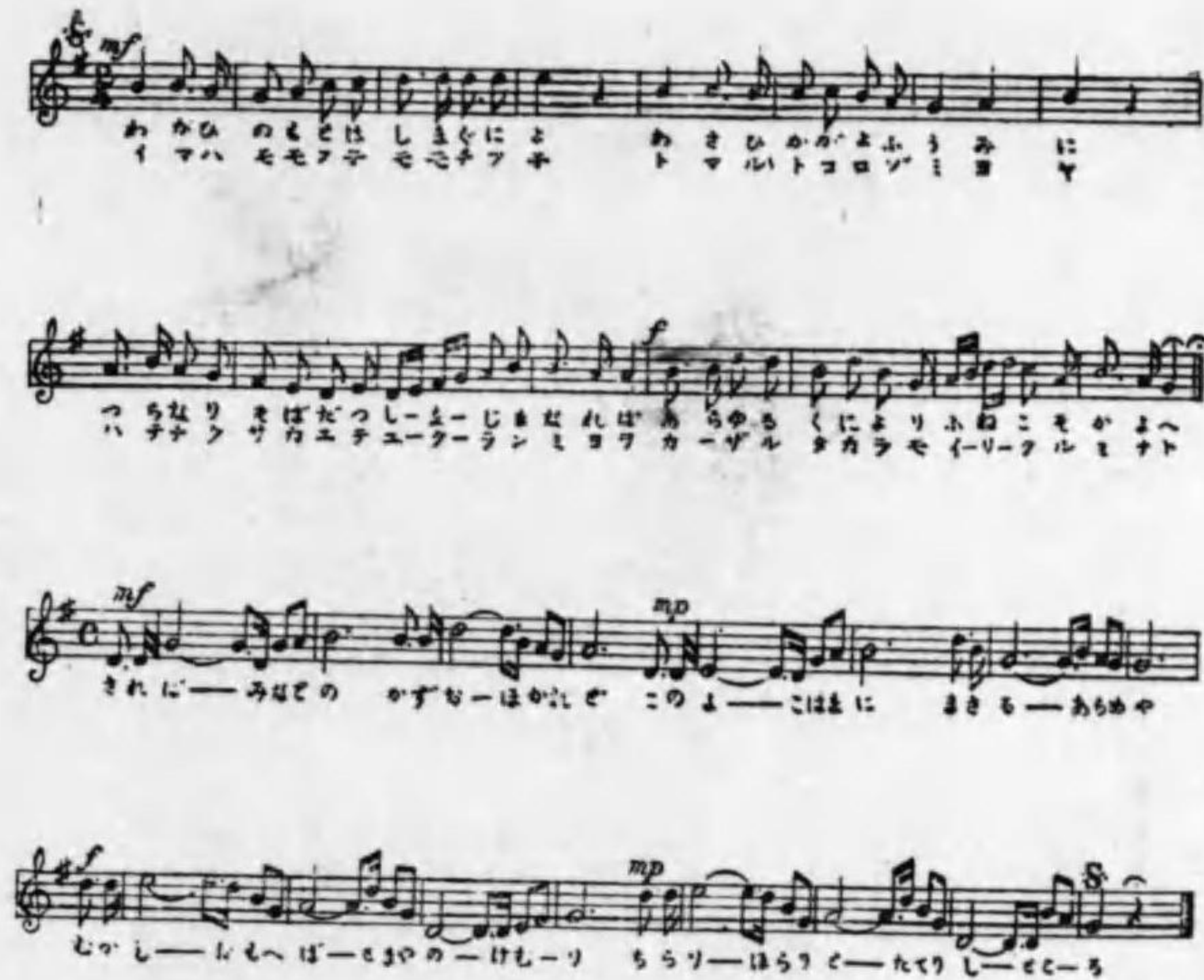
今は百舟百千舟

泊る處ぞ見よや

果てなく榮へて行くらん御代を

飾る寶も入り來る港

明治四十二年開港五十年を迎へるに至つた。七月一日(昭和三年から太陽曆により六月二日に改む)を記念日とし盛大なる祝賀會を開催した、このとき市歌を定めた、これは森歐外氏の作、南能衛氏の曲又同時に大槻如電居士作の濱菱が酒間に唄はれた、



四、新曲『濱の手振り』(長唄花の巻)

春霞、花咲く頃は花ぐもり、いづこの果も白雲の、花と見紛ふ花の空、春にもなれば絲櫻、柳の枝に錦織る、朝日に匂ふ山櫻、不斷の櫻は君が代の、延命櫻祈るなる、紫櫻樺櫻、手鞠櫻の絲括り、ひろい櫻に遅櫻、曉櫻、雲珠櫻、あつめてこゝに花の山、濱の盛りをつひ一目、千里も隣り隔てなき、外國人もこの造り、林のやうな帆柱の、ふねの煙りに空濶り、うそから出た誠かや、ヤレほんにこの姿を見そなはせ、ヤレほんに昔しの草は今日の軒、本牧はなまのあたり、人目の關の内と外、たれ憚からぬ沖合も、戀と名がつきや忍び足、そつといろはの神奈川や、便りして聞く今日の首尾、西に富士が根昔しより、變らぬものにとへたる、山や山々足柄、箱根、雨降、丹澤、ひるが嶽、遠に守るや山かけの、千秋萬歳大君は、仰ぐもおろか一天四洲、東西南北世界のはし、分けて港の繁昌は、四海の浪のおだやかに、ふな路の旅の安らけくあれと祈るしには、追手の風に勇むらむ

日露の干戈おさまつて御代大正の意氣たからかに景氣だつたのを機會に大正二年十月横濱勸業共進會を蒔田町で開催した。會場内附設演藝館で『濱の手振り』を上演した。作詞山崎紫紅氏、常磐津雪の巻、清元月の巻、長唄花の巻の三曲から成るものであつた。

横濱郷土小史

昭和六十一年四月十日印刷
昭和六十一年四月十五日發行

編者 横濱市鶴見區菅澤町一八一 大島 昇
 發行者 横濱市間門町一ノ一三七 山崎 次隆
 印刷人 東京市品川區東大崎一丁目五三二番地 光村 利之
 印刷所 東京市品川區東大崎一丁目五三二番地 光村原色版印刷所
 發行所 横濱市産業部觀光係

非
土
夏
の
風



博 興 復

(昭和六十一年二月二十七日横濱鎮可許濟)

五、歌謡曲 港むすめ

一三四

- 一、波止場春雨、しよんぼり濡れて、港むすめのすゝり泣き、思ひきれない他國の船の、うすい煙をなんとせう。
 - 二、泣いてみたとて歸らぬ君は、二度と會はれぬ旅のひと、投げたテープが一期の別れ、切れてはかなや戀の絲、
 - 三、野毛の山から眺めた港、雲のすがたも變らぬに、今日は涙のかたみを抱いて、ひとり濱邊で泣かうとは。
- 昭和十年の春、くりひろげられた絢爛の繪卷『復興記念横濱大博覽會』は百萬の入場者と絶讃を勝ち得て大成功だった。場内演藝館で『濱おどり』全曲六景が上演された。開港の當初から復興完成までの變遷を舞踊化したもので西條八十氏の作詞になる。前掲の歌詞は第三景黒船渡來の後半で唄はれたものであった。

415
83

橫濱市觀光係



終